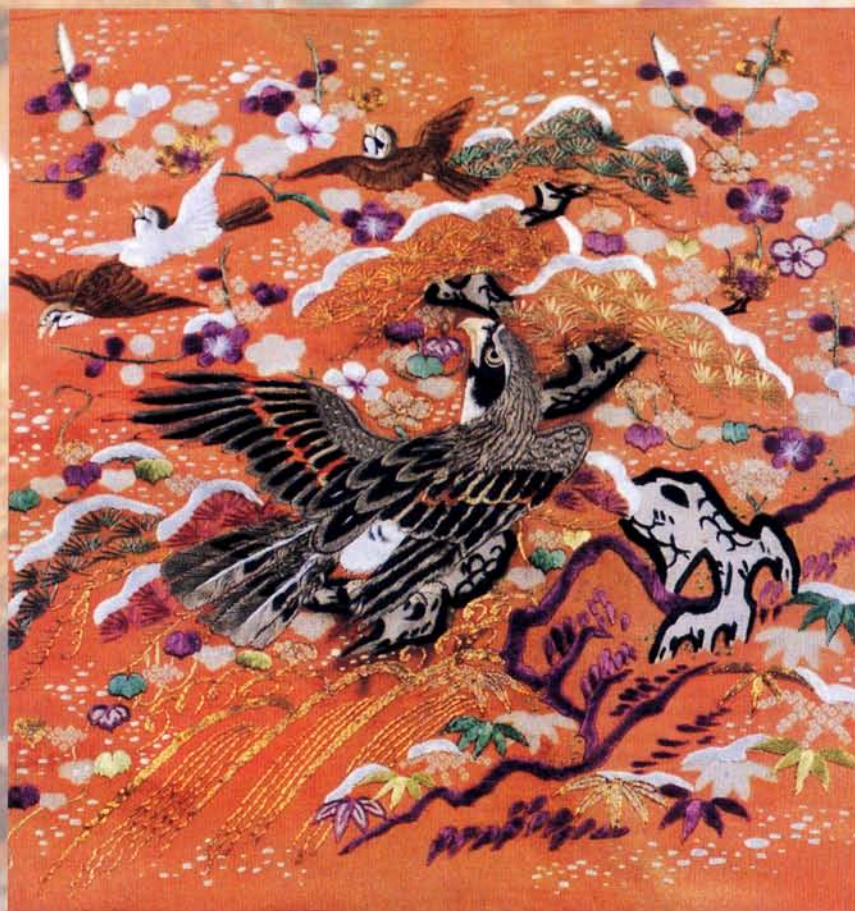


紅花資料館

よみがえりくれなげ紅花



山形県・河北町

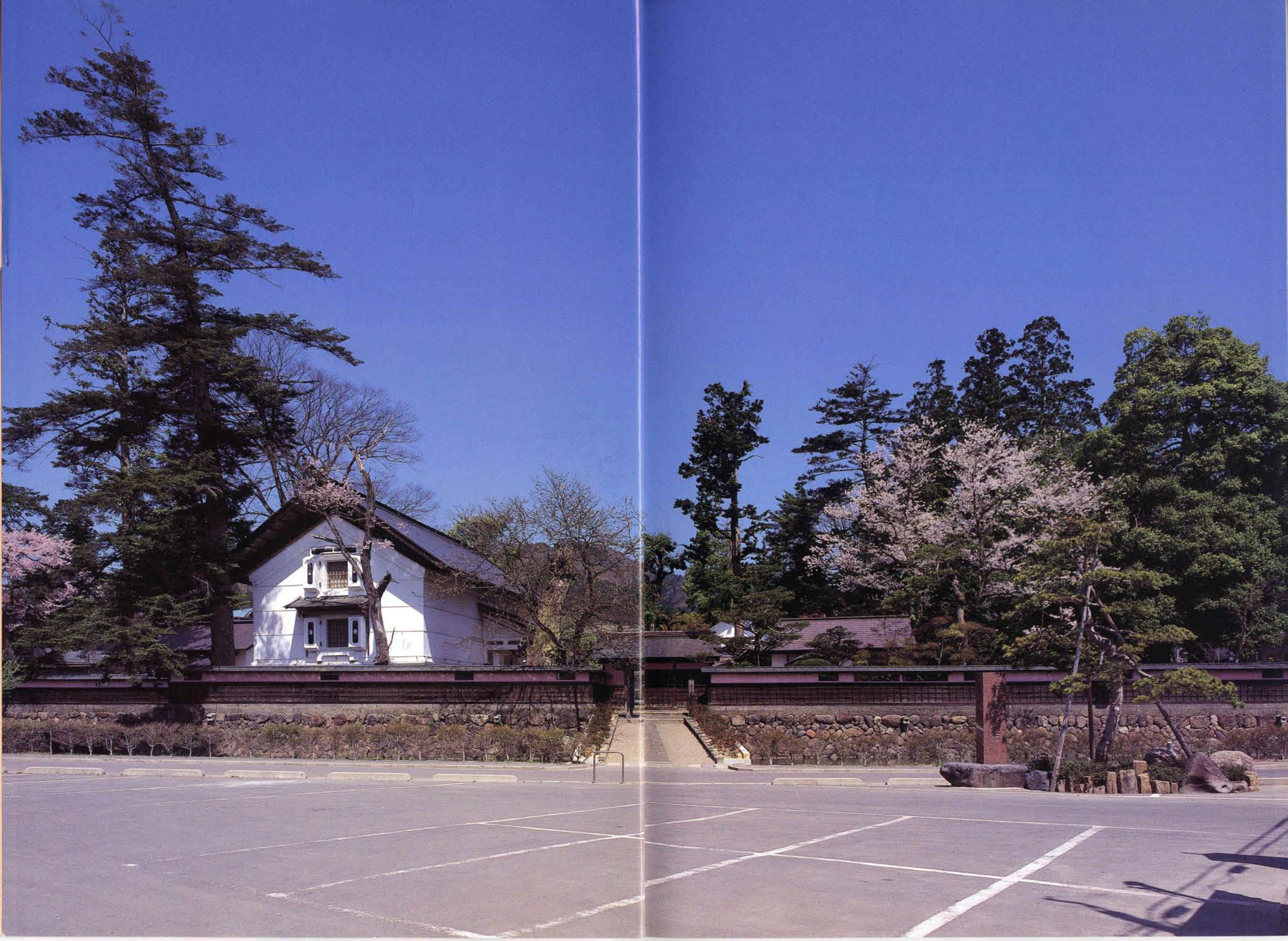
べにばな 蘇った紅花

河北町は「べに花の里」です。江戸時代には、特産の「最上紅花」（昔は村山地方を最上といました）が植えられ、可憐な花びらは紅餅（花餅）となって、はるばる京都へ送られました。そして、京都の紅屋の手によって紅餅から真っ赤な紅がつくられ、それが京おんなの唇を彩るとともに、紅色の美しい衣装を染めあげました。神秘的とも思える紅の美しさは、いつの時代も女性のあこがれのまどでした。

それほどまでに貴ばれた紅花でしたが、明治になると外国産の化学染料に押されて姿を消してしまいました。しかし、その後も宮中や皇太神宮の式典で用いられる服装はいつも本県産の紅花で染められ、紅花はひそかに生きてきました。

昭和56年に「河北町の花」を定めるとき、町では迷うことなく「紅花」を町の花に選び、その後、「紅花資料館」を開館し、さらに「紅の館」を増設しました。紅花は人々の心をとらえ、消えかけていた本物の美しさが見直され、紅花を愛する人々の力によって奇跡的に蘇ったのです。





ほりごめ 豪農堀米邸から資料館へ

この資料館は、近郷きっての富豪だった堀米四郎兵衛の屋敷跡です。屋敷の総面積は約80 a がかつては土蔵が6棟、板倉が7棟もありましたが、老朽化が甚だしく、母屋をはじめ多くの建物が整理され解体されてしまいました。この屋敷には武器や生活用品および古文書など5,000点を保存しています。昭和57年にこれらの寄贈を受けた町が、漸次整備修復を加え、昭和59年5月に「紅花資料館」として開館したものです。

堀米家は、元禄の頃から農地の集積を行い、文政年間から明治期まで名主や戸長を勤めた家柄です。その間、米・^{あおそ}青芋・紅花の集荷出荷などによって財をなしてきました。紅花は、文化年間（1804～1818）から精力的に取り扱い、町内でも指折りの豪商に成長しました。蓄積された財貨は、農地の開拓や金融に向けられ、大名貸しも行っていたと考えられます。伊達藩白石城主や庄内藩酒井公の拝領品が保存されていることから推察できます。幕末期における資産の概要は農地が60町歩（60ha）・山林が100町歩（100ha）・貸付金が8,500両・奉公人20名・小作人200名で、本町内では上位の豪農豪商でした。

堀米家の著名な業績として、幕末期の農兵組織への支援と実践活動が上げられます。世相が混沌としてきた文久3年、幕府は治安の維持を目的に、各幕領・私領に対し、農兵取り立てを命じました。この命令を受けた6代目堀米四郎兵衛は率先垂範して農兵の組織立てをし、東北で最高の水準にまで高めました。農兵の編成に関しては一部に反対意見があり、その組織化にはどの農兵頭も苦^{のりかつ}勞しました。堀米四郎兵衛則勝は、西川町吉川の新山神社から由緒譲りになった朱印状を奉安するために、文久3年に御朱印蔵を建立しました。朱印状の保有は將軍の庇護を意味したもので、農兵の取り立てには好都合であり、親類や小作人で167名の農兵を編成し、時折訓練を行い、非常時に備えていたのです。この農兵隊があったため、この地域には百姓一揆や打ちこわしが一件もなかったといわれています。

農兵隊の武器弾薬を収めていたのが武者蔵で、文久3年から5年間、7挺の大砲を始めとする武器や数々の具足が収蔵されていました。堀米家は幕領であったものの、官軍とも幕府軍とも旗色を鮮明にしていませんでした。しかし、これらの武器は戊辰戦争の際、庄内酒井藩や官軍に相次いで接収されるという事態にあります。大砲や武器は庄内軍にとっても必須の用品でしたから、庄内軍が谷地に進出した際、この武者蔵は接収されてしまいました。ついで、庄内軍退却のあとに攻めてきた官軍は、堀米家が幕府に組したと誤解し、四郎兵衛則勝は逮捕されるはめになりました。ほどなく身柄釈放となった四郎兵衛は、堀米^{みのる}実と改名し、明治12年第1回県会議員となり翌年から県会副議長を勤めることになりました。その後、9代目の^{やすたろう}康太郎氏は大正の末、子供の教育のために東京に一家転住しました。長男の^{こうへい}耕平氏は早大、次男の^{ていじ}悌二氏と三男の^{ようぞう}庸三氏は東大、長女の^あ美穂さんは御茶大、四男の^{てつや}鉄也氏は慶大を卒業しました。鉄也氏の娘が世界的バイオリニスト堀米ゆず子さんです。

敷地内の広大な庭園の最も幽邃な場所に、堀をめぐらした御朱印蔵が建っています。文字通り朱印状を保管する蔵です。^{からほふこうはいつきいりもやづくり}唐破風向拝付入母屋造の土蔵で、棟梁は松田仁作、設計及び正面の彫刻は

細谷藤吉、木鼻の獅子は高山文五郎の作です。文五郎は、子の富重とともに能登の総持寺などの彫刻を行った名工の一人で、昔の谷地の職人の伎倆の高さを顕示しています。御朱印蔵は幕府の権威を誇示した建築ですから、明治政府の代になるとすべて取り壊されました。しかし、この地は辺地にあったほか宛名がよその朱印状であったこともあって、難を逃れ残ったのです。御朱印蔵としては県内唯一のものであり、全国的にも極めて珍しい建造物だといわれています。しかし、重要文化財にはなっていません。開館する際に損んだ箇所化粧直しをしたからです。貴重な遺産や由緒のある文化財の保存は難しいものです。

昔の母屋は茅葺きで間口16間(29m)もある大きな建物で、部屋数は15以上ありましたが、今は小さく建て替えてあります。座敷蔵は江戸中期に納戸蔵として建てられた蔵で当町では最も古い形式のもので、内部を座敷にしたのは明治初期で、床の間の蹴込みには鶴と亀の彫刻がほりこんであり、襖絵は伊達藩の絵師、緞斎が安政元年に描いたものです。戸袋の襖の裏に金箔の絵をほどこし、柱は面皮柱をもちいるなど、目だたないところに贅を尽くしている蔵です。多くの日用品などとあわせて、紅花商人の生活がうかがえるように展示してあります。

敷地の奥には昭和61年に竣工した「紅の館」があり、紅花の生産から流通までの様子や紅花から作られたものなど紅花のすべてがわかるように展示されています。

平安時代の初期から林家に伝わってきた舞楽は、9月14、15日に谷地八幡宮で奉納されます。「陵王」は舞楽の中で最も勇壮華麗な舞で、紅染の衣装を着て舞います。

館内には紅花染の染分け見本が展示してあります。紅花からは黄と赤の2種類の色素が出るので、黄染と紅染が染められます。紅色は重ね染めすることによって次第に濃い色になっていきます。一回ごとに新しい紅餅を使いますので、10回染めの深紅は1回染めの10倍の値段になります。黄色と紅色の重ね染めが黄丹で、皇太子殿下の式服(袍)の色です。紅と藍を重ね染めした布は「二藍」と呼ばれ天皇陛下の式服の裏地はこの色です。ほかの人の着用をゆるさない禁色でした。平安時代、深紅の紅花染一反が、公家1軒分の財産に相当したといえますから、紅染の衣装はきわめて貴重だったのです。

レーザーデスクでは、「紅花の生産と流通」「紅染の手法」「谷地どんがまつり」などの番組がみられます。紅花の歴史や生産や流通、さらには紅花染めの手法などがわかりやすく解説されています。紅花は最上川の難所をさけて、大石田まで馬で運びました。馬一匹が運ぶ量は120kgで一駄と呼びました。一駄が取引の単位で、当時約50両、米100俵分の値段でした。大石田からは川船で酒田へ、酒田から敦賀までは北前船で、あとは陸送や水運で京都に上せました。その間、約1カ月、全国の生産量の半分を占めた最上紅花は、その名声を全国にとどろかしました。

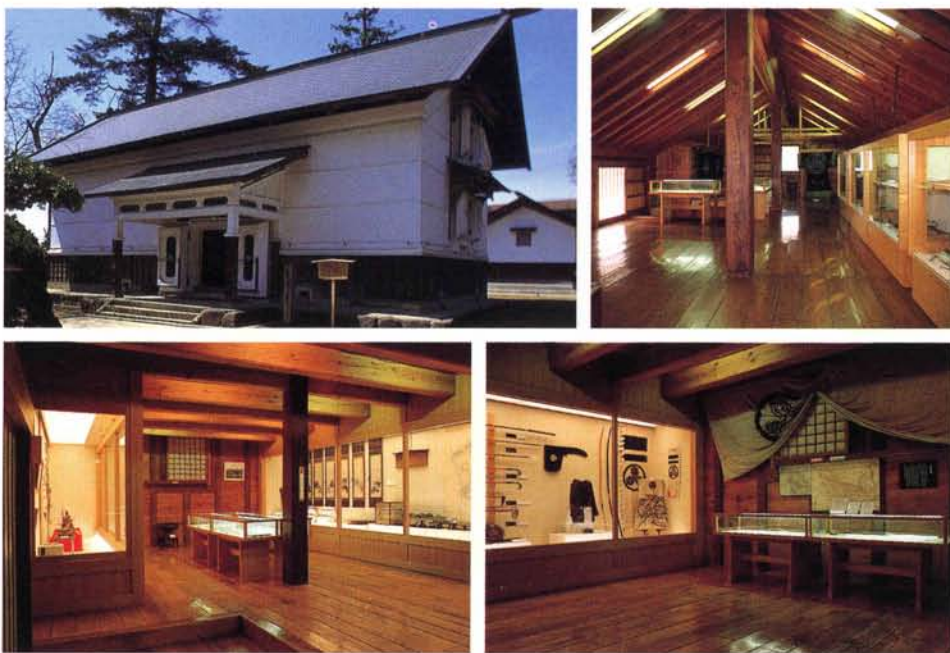
紅花を京都に運んだ船は、返り荷として生活必需品をはじめ多くの上層文化をもたらしました。人々のあこがれの的であった紅花染の衣装、女性の唇を愛らしく彩った紅ちょこ、陶磁器、享保雛・古今雛・竹田人形・御所人形など上方の人形たちが、みちのくの地に根強く生き続けながら、今ここに新たな形で花開いたといえるのです。

《旧堀米邸》



長屋門

江戸末期に建てられたもので、格子片番所付長屋門である。塀の上壁は、京より求めた紅殻べにがらを加え加工したもので、復元するときも同じ工法でつくられた。当時は、名主と武士待遇を受けている者だけが、長屋門をもちいることができた。



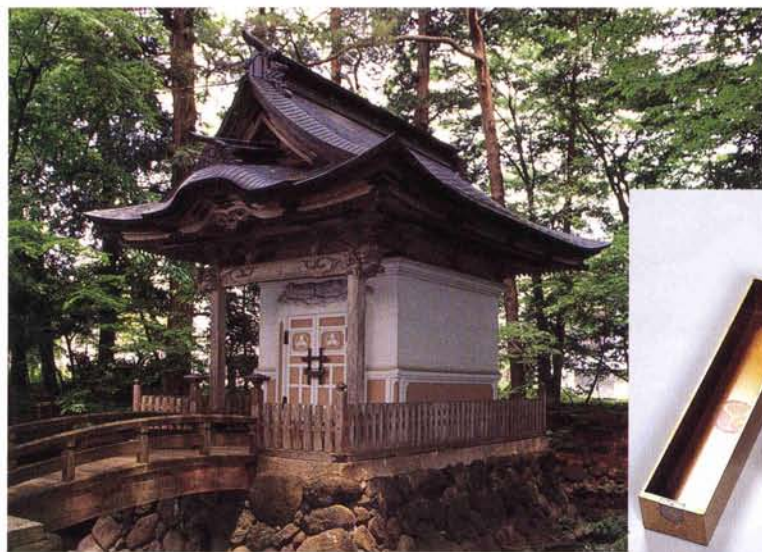
武者蔵 (農兵隊武器庫)

嘉永6年(1853)に建てられたもので、文久3年(1863)から慶応4年(1868)にかけては、幕府の命によって組織された農兵隊の武器蔵として活用された。



座敷蔵

江戸中期頃の掘建式の蔵で、6棟あった土蔵の一番蔵と呼ばれていた。町内で最も古い蔵の一つであり、後世に座敷蔵に改造し、客室として利用されていた。床の間の蹴込みには彫刻がほどこされ、柱は面皮柱を用い、襖絵は絹斎（安政元年・1854）の作である。



御朱印蔵

御朱印蔵とは朱印状の収蔵庫で、近郷吉川村の新山神社から譲り受けた御朱印状を納めるために、6代目堀米四郎兵衛則勝が願主となって、文久3年（1863）に建立したものである。唐破風向拝付入母屋造の土蔵で、棟梁は松田仁作、設計および正面の彫刻は細谷藤吉、木鼻の獅子は高山文五郎の作、ともに郷土の生んだ名匠である。



工房くれない

町内に残る蔵を移転復元したもので紅花染・こけし絵付け・わら細工などの体験学習の場として利用されている。



沢畑こぶ石

通称「沢畑のこぶ石」と呼ばれている石は、推定310万年から200万年以前、出羽丘陵の葉山が大爆発した際生じた火砕岩である。苔が生え易く古色を持ち風情あるため、京阪地方では「出羽のこぶ石」と呼ばれ珍重された。町内では、現在も庭灯籠の笠石や、火袋、また手水鉢等の石材として利用されている。

紅花の句碑

細谷鳩舎（河北町）の句で「紅花に紅しみ来て人を待つ」と刻まれている。紅花の摘み時は「三片紅」といって黄色い花に3～4枚の紅をにじませた頃である。ちょうど摘み時を迎えた紅花が若やいだ姿で人を待つというのである。





青銅水盤（白石城主からの拝領品）



明朝螺鈿高台（白石城主からの拝領品）

堀米家では大名貸しもやっていた。大名は財政が不如意になって豪商から借金し、返済に苦しむと、貴重な家宝を借金の抵当にもってきたという。それらの品を拝領品と呼んでいる。



御膳類

堀米家には、代官や巡見役の出入りがあり、こうした客人の接待に使われた。御膳には、四季折々の絵をほどこした蠅帳をかけていた。



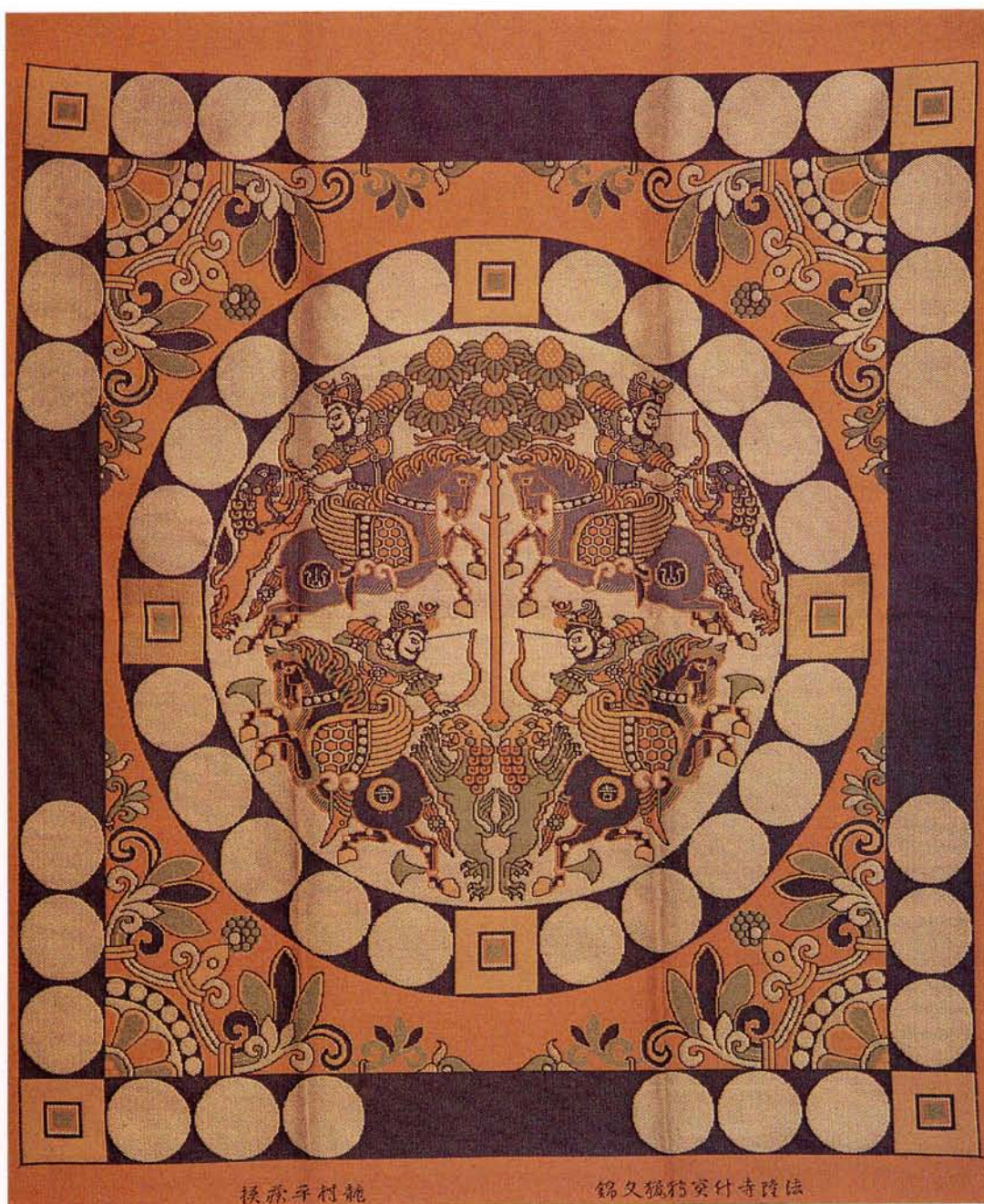
さわばとう
沢畑刀

6代目四郎兵衛は、伊達生まれの刀工守国を白石から招いて、自宅裏屋敷に鍛冶場を設けて多くの刀を造っている。「羽州谷地住藤原勝光」と銘を切っているのがこの時のもので、慶応年間の刻銘が最も多く見られる。



さわばたやき
沢畑焼

明治5年、6代目四郎兵衛が法師森にのぼり窯を築き、その地の土を用いて陶土とし、仙台堤焼の職人5名を招いて日用品を製作して「沢畑焼」と呼んだ。製造の期間は10年間ぐらいで、釉薬の不具合から窯は閉められたが、その窯跡は今も残っている。



榎森平村龍

銘久猿狩宮什寺隆法

ししかりもんかん
獅子狩文錦（法隆寺）複製

7世紀の初頭、聖徳太子の命により遣隋使として中国に渡った小野妹子が、隋の煬帝ようだいより贈られたとされる錦で、法隆寺夢殿に長い間秘められていた。その錦を復元するために、織物研究家の龍村平蔵氏が、長い歳月をかけて織り上げたものである。中に紅染も見られる。

《紅の館》



林家舞楽（国指定重要無形民俗文化財）ジオラマ

林家舞楽は、貞観2年（860）山寺の立石寺開創と同時に伝えられた舞楽で、古いおもかげをとどめている。

『陵王』 印度の戒日王の作「陵王の喜び」という古代歌劇の一節をとった沙羅龍王の舞。装束の赤色は紅染めである。



こがねいぶね
小鵜飼舟（模型）

最上川の急流に適するように改良され、紅花や米を酒田まで運んだ川舟である。小鵜飼舟は元禄以降阿武隈川から移入された舟で、3人乗りで、軽いうえ、へさきが流線形をしてスピードもあり、最上川舟運の主流を占めるようになった。



北前船（模型）

江戸中期から明治の始めにかけて日本海海運の主力となって活躍した廻船を北前船と称した。順風時以外は櫂で漕がなければならず多数の船子が必要とした。



船箆箱

船の動揺にもほかの器物との衝突にも耐えられるように、角はもちろん、抽斗^{ひきだ}しの引き手なども、武骨なまでに金具が用いられている。材は外が樺で内に桐を使用している。



古文書

谷地の紅花商人は近郷から紅花を買い集め、それを大石田から川舟に積んで、酒田経由で京都に送った。堀米家にも多くの紅花に関する古文書が残されている。



紅花燈籠

天保7年（1836）大阪市の住吉大社に奉納されたもので通称「紅花燈籠」と呼ばれている。高さ6.7メートルの花崗岩製の壮大な燈籠である。



長明燈

文久2年（1862）3月、山形の佐藤屋利兵衛ほか22人の紅花問屋（永寿講）によって住吉大社に奉納された。高さ6.9メートルの豪壮な燈籠である。

お雛様

京都からの帰り荷にはいろいろなものが積まれてきた。お雛様もその一つで、町内にはたくさんの雛が大切に保存され、毎年、月遅れの4月2日と3日を中心に自宅公開されている。江戸時代の人形の衣装にも紅花染が使われている。



享保雛（江戸中期）

面長の顔、きれ長の目を持ち、能面のような神秘的な表情をしている。たいへん優雅で、金襴の豪華な衣装をつけている。



次郎左衛門雛（江戸中期）

京都の人形師の雛屋次郎左衛門によって考案された雛で、丸顔に引目鉤鼻、おちょぼ口が特徴である。

男雛と女雛の右と左

我が国の故実では、なんでも御所を中心として考えられてきました。『天子南面』ということわざどおりです。ゆえに京都では、昔と同じに、向かって右が男雛、左が女雛です。この左右がかわったのは、昭和3年、昭和天皇の即位式を参考にして、東京の雛人形業界で、内裏雛の左右を決めたといわれます。



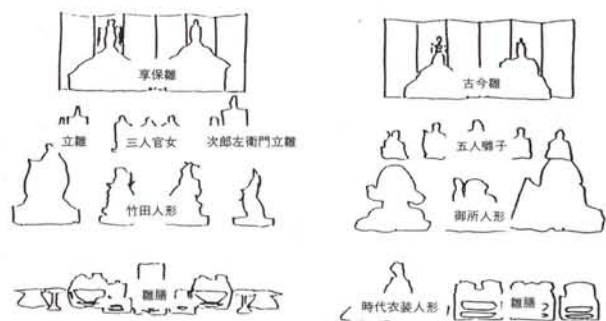


紅花屏風（複製）

山形県六田村（東根市）に生まれ、江戸に出て中橋狩野永真に学んだ画家青山永耕（1814～79）の作品で、最上紅花の生産から取引・運送までの経過が生き生きと描かれている。

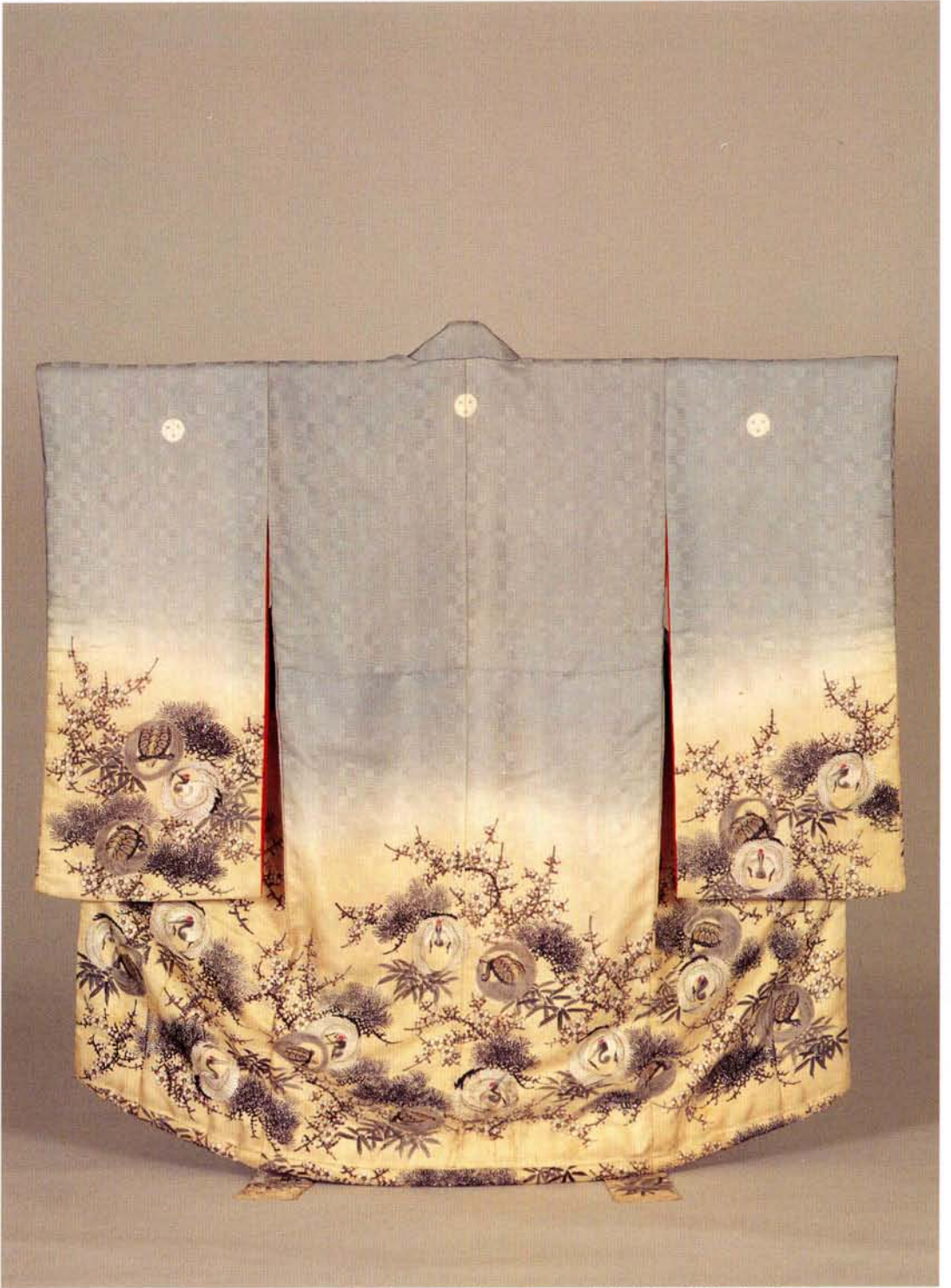
（原本 山寺芭蕉記念館所蔵）



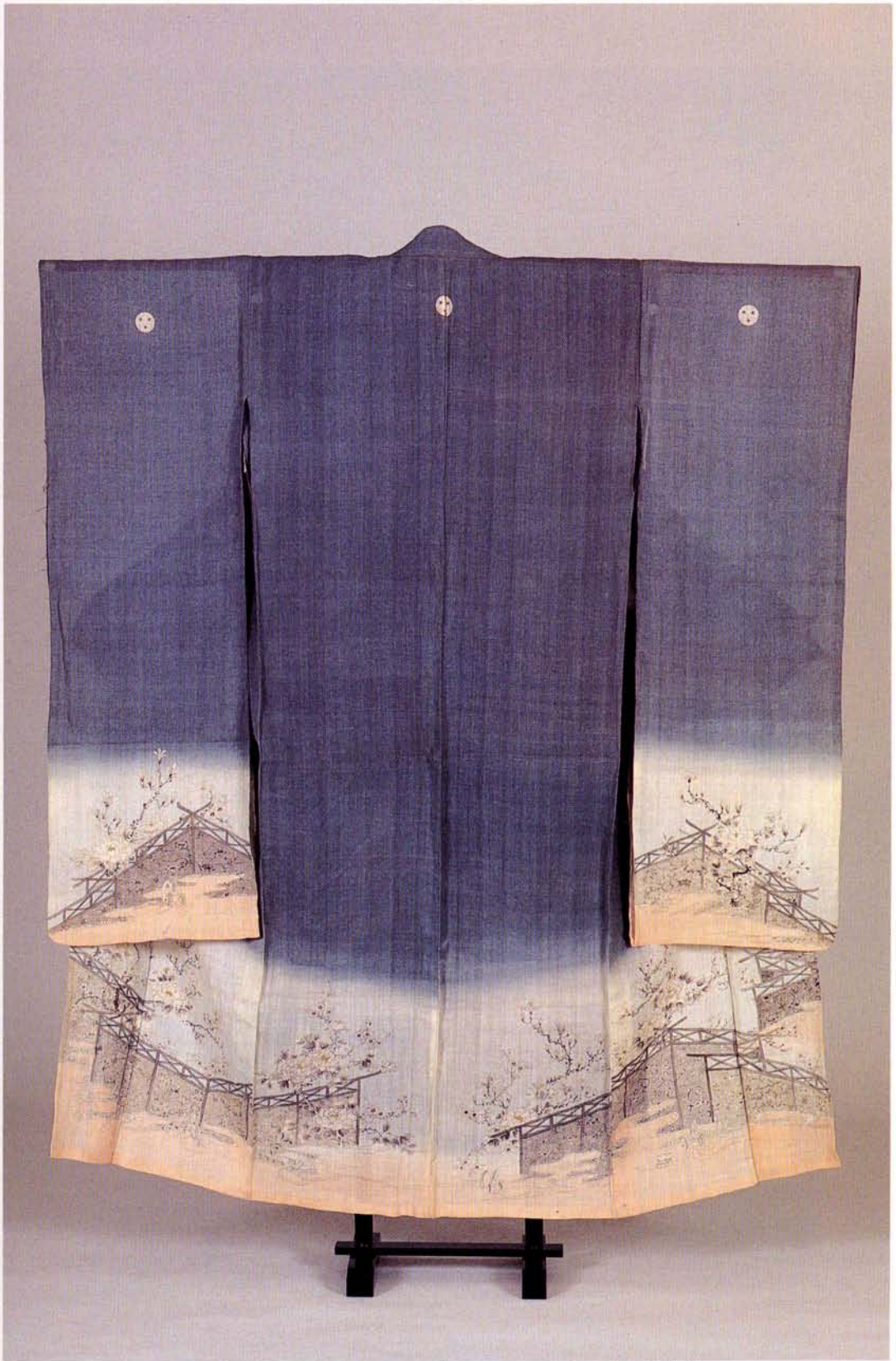


紅染衣装

最上（今の村山地方）から紅染の原料である多くの紅花が出荷され、京都でみごとな紅染衣装がつくられた。そのすばらしい衣装が帰り荷として、最上に運び込まれた。



かめあやおりきぬ じつるかめ しょうちくばいよくじゆ も ようあい すみ べにあげぼのぞめおんななかだちいわい ぎ
亀綾織絹地鶴亀に松竹梅福寿模様藍に墨と紅 曙 染女中裁祝着



ようりゆうじょうふじまがき はるはなも ようあいずみ べに あげぼのぞめひと え おおふりそで
楊柳 上布地籬に春花模様藍墨と紅の曙 染単衣大振袖



べにちりめんしぼ ししゅうはなもようこそで
紅縮緬絞り刺繡花模様小袖



べにりんぞ じせんめん はなも ようしほ ぬいふりそで
紅綸子地扇面に花模様絞り繡振袖



べにりんずじそうしほふりそで
紅綸子地総絞り振袖



べにりんず じしやうちくばいつるかめ ししゆもんようふりそで
紅綸子地松竹梅鶴亀刺繡 文様振袖



べにりんず じつる しょうちく きつこうもんしぼりぬいふりそで
紅綸子地鶴と松竹に亀甲文紋 繡振袖



べにりんぞう じしやうちくばいつるもんしほ ふりそで
紅綸子地 松竹梅鶴文絞り振袖



べにりんず じかすみ たけもんしぼりぬいふりそで
紅綸子地震にしだれ竹文 絞 繡振袖



べにりんず じつる なみもんようゆうぜんこそで
紅綸子地鶴に波文様友禅小袖

現代の紅染衣装

一時は、化学染料の普及によって衰退の一途をたどっていった紅花染であったが、現在蘇った紅花染は、またすばらしい衣装をつくりあげている。



べにばなこうし どうじょい すずし
紅花格子童女衣「生絹」

人間国宝 志村ふくみ 作（京都府）



こまどんす じ きりきくはな も ようそめいおおふりそで
駒緞子地桐菊花模様染繡大振袖

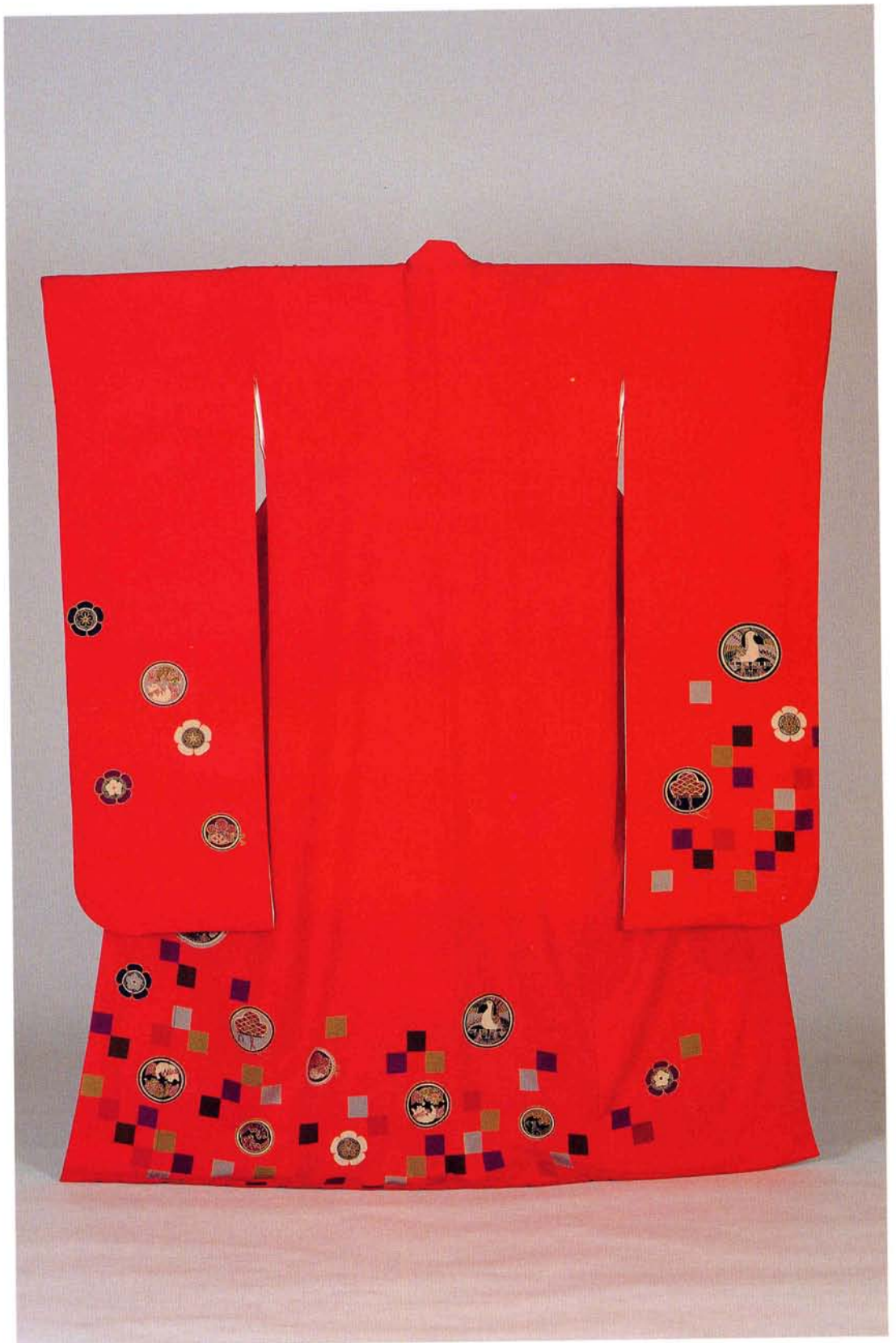
鈴木孝男 作 (河北町)



いろぬきぬいわけべにばなえまきずもんようやまとにしき
彩緯縫分紅花絵巻図文様 倭錦 戸屋優作 (米沢市)

山形県有形文化財「紅花屏風」(青山永耕筆)の生産から流通までを二部構成で織り上げた。





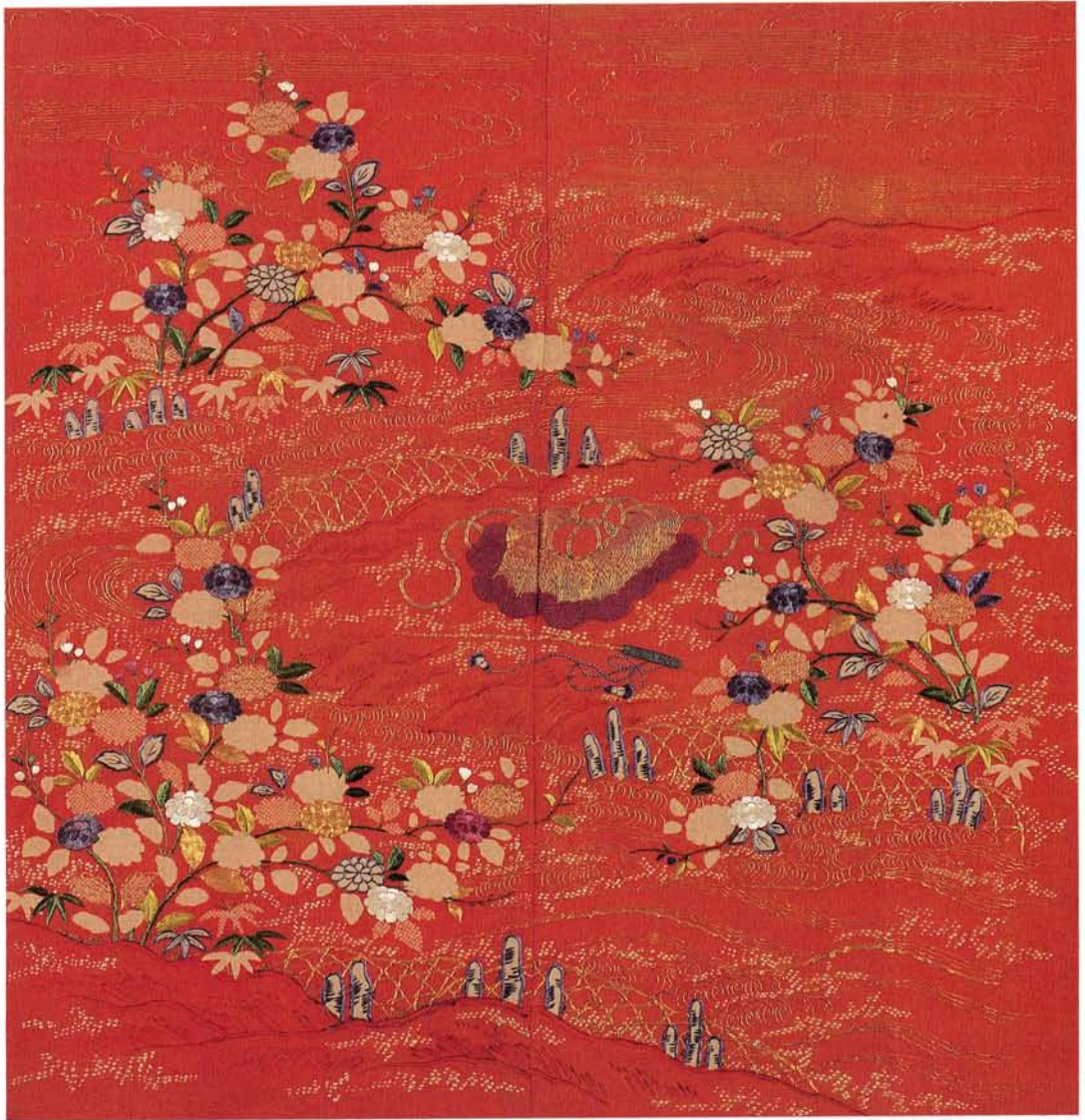
べにばな じぶがくもんようふりそで 株式会社「染竹」 作（京都市）
紅花地舞楽文様振袖

第47回べにばな国体で使用したもの

化粧

紅は、古くはこれを顔に塗り唇につけたといわれている。江戸時代元文ごろから、顔に塗るのは特殊な場合のときで、常には白粉だけとし、紅はもっぱら唇に塗ることになった。天明ごろからは紅に艶紅、笹紅という玉虫色に光る特殊なものが流行したが、幕末にはすたれたという。京紅といって京都が本場であり、皿にいれたのを紅猪口、板につけたのを紅板といい、これを紅さし指の唾でつけた。目の横につけるのを目弾き、爪につけるのを爪紅と呼び、つけ方も下唇の中心を濃く、左右を薄くさしたという。





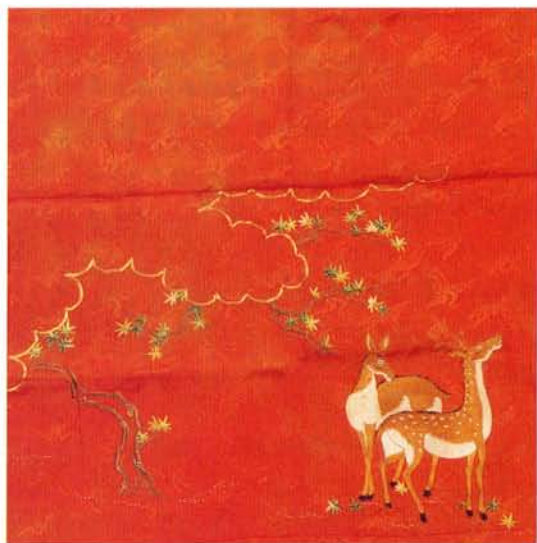
うちしき
紅染打敷

うちしき
打敷

一般に広く敷物をさし、平安中期ころから、とくに錦や綾などのみごとな裂地を用い、調度の下あるいは上を装飾するようになった。王朝文化の調度として実用を兼ねて行われ、宮廷女性の感覚がこの美しい装飾を生んだものと思われる。

ふくき
袱紗

茶の湯の点前に用いる布で、これで茶具をふき清めたり、また客の道具鑑賞のさい、その下に敷いて用いる。また《出し袱紗》といって濃茶のときに茶わんに添えて出す袱紗があるが、この場合は金襴、緞子、間道、毛織などの名物裂が賞用される。



紅染袱紗 よこき

べにばな 紅花

紅花の原産地

今ではハナといえはさくらのことですが、昔は紅花のことでした。ハナ畑・ハナ摘み・生バナ・ハナ寝せ・干バナ・水バナ・ハナ染など、いずれも紅花にかかわることばです。

紅花は地中海沿岸、またはエジプトが原産地といわれているキク科の植物です。耐寒性で、茎の高さが1メートル内外、7月上旬には茎頂にアザミに似た鮮黄色の可憐な花をつけます。

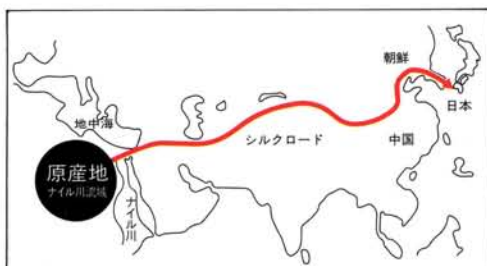
それでは、紅花は原産地のエジプトから、どういう道をたどって日本にきたのでしょうか。

中国の有名な『西域物語』という本には、「今から2200年程前に張騫^{ちやうけん}という人が中央アジアに行った時紅花の種を持って来た」と書いてあります。漢の武帝の時代のことで、張騫は紀元前139年、武帝の使者として長安を出発しました。武帝は大月氏と結んで匈奴を攻めようというはからいでしたが、張騫は不運にも途中で匈奴に捕えられますが、自力で脱出して長安にもどって来た、というえらい人物でした。

張騫が紅花を中国に持ってきたというのは、彼の偉大さを伝えるための物語りで、紅花の普及は決して彼一人の力ではなかったと思われます。シルクロード沿いに住む多くの人たちが、長い年月をかけて次々に紅花の栽培法と染色法を中国に伝えたのでしょう。

中国産の絹はヨーロッパ人から好まれ、シルクロード（絹の道）を通過して西へ運ばれましたが、紅花は同じ道を西から東へ渡って、中国にきたことは確かです。

文化の東漸にしたがって、中央アジアからインドなどに伝播した紅花は、推古天皇の時代（593～629）に中国との文化の交流によって、わが国にもたらされたといわれています。



紅花の植物誌

学名 <Carthamus Tinctorius L.> 1753年にリンネにより命名
(アラビア語の染める)(ラテン語の染色用の)

【双子植物綱—合弁花亜綱—ききょう目—きく科—きく亜科—管状花族—あざみ類—やまくぼち亜類—べにばな属(20種)】

草丈0.5～1.2m、葉は硬く、互生し、深緑色、広皮針形で先がとがり、ふちに鋭いとげ状のきょ歯があり、7月上旬アザミに似た鮮黄色の花をつけ、花弁はやがて赤色に変化します。花は茎頂につき、管状花で径2.5～4.0cm、長さ2.5cmくらいの頭花をつくり、最初に開花するのが主茎頂花で、ついで各節の第1次分枝頂花が開花、その後第2次分枝が開花します。総苞は外側のものが大きく、葉状となり（包葉）、ふちにとげがあり、そう果（子実）は白色で、光沢があり、長さ6mm、冠毛は非常に短く、8月上旬に成熟期に達します。茎の太さは7～8mmで7～15本くらいの分枝が発生し、根は直根性の太い根が発達し、移植を嫌います。

染色資料、口紅などの化粧用として栽培されています。

紅花の品種

現在、県内に栽培されている紅花は、ほとんどが出羽在来種の中生種の中から山形県立農業試験場で系統分離した「もがみべにばな」と呼ばれているものです。また、在来種の中から系統選抜したものに「とげなしべにばな」があり、これは、主に切花用に用いられています。その他、紅色素を持たない「黄色種」や「白色種」などの変わった紅花もあり、さらに早生種、晩生種、アメリカ種、岡山種、中国種、カシュガル種、イスラエル種、ブラジル種等があります。

もがみべにばな	項目	とげなしべにばな
葉先に鋭いとげ	とげ	発達していない
約1m	草たけ	約70cm
7~15本	分枝数	少ない
小さい	花冠	大きい
薄い	葉色	濃い
7月上旬	開花期	6月下旬



もがみべにばな



とげなしべにばな

用途と効用

- 花……生花、ドライフラワー（鑑賞用）
 - 干紅花（薬用、嗜好品、茶、酒）
 - 紅色素（着色剤、化粧用、染用、薬用、美術用）
 - 黄色素（着色剤、染用、美術用）
- 実……紅花油（食用、薬用、塗料、紅花墨）
 - 絞り粕（肥料、飼料）
- 葉……（食用、茶）
- 茎……（茶、飼料）

紅花の花弁に含まれる色素には水に溶けるサフロールイエロー（黄色）と水に溶けないカルタミン（紅色）があり、ともに染料にされます。

純度の高いカルタミンを口紅としてぬれば、唇の荒れを防ぎ血行をよくし、紅で染めた布を肌につけると体が温まるというので腹巻・たび・ゆもじ・腹帯に使用しました。出羽三山参りの行者の腹巻にも紅花染が使われたといわれますし、冷え性の婦人に薬効があるというので、花を陰干しして煎じて飲んだりしました。

紅花の種子からは、血管壁についたコレステロールを除く働きを持ち、高血圧予防に効果があるとされているリノール酸を含む良質のサフラワー油がとれます。サラダ油・天ぷら油・マーガリン等の食用油として使われています。また、種子の油を灯油に用い、その際に出るすすで紅花墨という上質の墨が作られます。

若い茎葉は上等の野菜となり、花は活花やドライフラワーとして使われます。

紅花のそだて方

- ①種播き……………1㎡当たり完熟堆肥4kg、化学肥料100g、苦土石灰700gをめやすに散布します。3月下旬～4月上旬、排水のよい土地に種を1穴に3～4粒をまいて種子がかくれる位土をかけます。
- ②間引き……………4月中旬ころから20センチくらいになるまでの間に2～3回間引きをして、1平方メートルに25本くらいにします。(間引きしたものは、おひたしなどにして食べられます。)
- ③追肥……………4月下旬から5月下旬に軽く化学肥料を追肥し土寄せします。
- ④病虫害防除……………炭素病に弱いのでエムダイファー水和剤、マンネブダイセンM水和剤、メルクデランK水和剤600倍のいずれかを7～10日間隔でいいねいに散布します。アブラムシを防ぐためオルトラン粒剤を散布します。
- ⑤花……………7月上旬ごろから花が咲きます。花卉が十分に開いたら、切り花にできます。開花して花卉に朱色がさした頃、花卉をつみとり干紅花にします。
- ⑥ドライフラワー……………生花を風通しのよい日陰に、雨が当たらないようにして約1ヵ月つるしておけば、きれいなドライフラワーができます。
- ⑦種子……………種子をとるには、花の咲いたまま栽培をつづけ、枯れあがってから脱粒します。

染料の種類

天然染料と化学染料があるが、化学染料は19世紀に発明されたもので、わが国への輸入は幕末と伝えられ、アニリン染めと呼ばれていました。取り扱いが簡単でしかも色相の多い化学染料の発明は画期的な出来事で、たちまち、紅花も含め植物性染料の世界を侵してしまいました。しかし、化学染料にはない色相の深みと、長年用いられてきた技術の伝統的な落ち着きをもった天然染料は、その後、その美しさが見直され、本物を愛する人々にもてはやされています。

植物染料には、植物そのものが染料となるものと、種々工作して染料になるものがあります。原料も、葉・茎・幹・皮・花・実・根と染料をふくんでいる部分が違っており、また色素も、直接染料と媒染染料があり、媒染剤によっていろいろ変化します。

主な植物染料

- 赤……………紅花(花)・蘇芳(木)・茜(根)
黄……………黄蘗(木皮)・刈安(茎・葉・根)
鬱金(根茎)・山梔子(実)・紅花
青……………藍(葉・茎)・露草(花)
紫……………紫草(根)
茶・黒……………椴(樹皮・根皮・実のへた)
檳榔樹(実)



紅花染の技法 (色出し方)

陽光に色褪せやすく移ろいやすい紅の色、そしてやわらかい暖かみのある優雅な紅の色。紅花は赤色と黄色の色素を含んでいます。

きれいな紅色に染めるには、水に溶ける黄色をできるだけ取り除きます。赤の色素は木綿・絹が非常に良く染まりますが、黄の色素は絹には染まり木綿には染まりにくい性質です。絹・麻・木綿などの材質によって、濃染めの紅から桃色・黄色などに染まります。

黄……………紅花の黄色の染料で染めます。

淡 紅……………紅花の紅色の染料で一回染めます。

濃 紅……………紅花の紅色の染料で数回重ね染めします。

オレンジ…紅色の染料で数回重ね染めし、その上に黄はだを上掛けします。

(紅染めの色止めに使われます。)

ローズ……………紅色で下染めをし、栗のいがの染液をうすめたもので上染し、銅媒染で仕上げます。

あずき色…紅色で下染めをし、栗のいがの染液をうすめたもので上染し、鉄媒染で仕上げます。

グリーン…紅花の黄色で下染めをし、藍で上染めします。

ふた 藍……………紅花 (呉藍) の紅色の上に藍で上染めします。

はねず おうに 朱華(黄丹)……………くちなしや、うこんで下染めをし、濃い紅色を掛け合せます。

びんろうじゆくろ 檳榔樹黒(紅下檳榔樹)……………紅で下染めし、檳榔樹と五倍子の煎汁を配合して引き染めし、鉄塩で黒く発色します。



誰にでもできる紅花染

1. 花びらを摘む。(花の色が黄色から山吹色に変わり、朱色が指した頃)
2. 水あらいする。
3. 軽く絞ってビニールの袋に入れて密封する。
4. 一昼夜のちに取り出し、すり鉢ですりつぶす。
5. すりつぶした花を固く絞って錢状にし、一週間から十日間、風通しのよい日陰で乾燥させる。これを紅餅という。
6. 紅餅(染める布の量と同量の紅餅が必要)を木綿の袋に入れて一昼夜水出しする。
7. 一昼夜過ぎると水が黄色になる。潰けこんだ袋をしぼって、取り出す。この最初の黄色の液が黄汁染の染料となる。
8. 再度水を取り替えて、5時間ぐらい潰けこみ、もみ出して、絞り出す。これを1日、3回繰り返す。
9. 8番の工程を黄色の液が出なくなるまで一週間ぐらい繰り返す。
10. 薬局で市販している炭酸カリの8%溶液を作り、先程の袋をつけこむ。
11. 10分毎にもみ出し、30分後に絞る。
12. また新しい炭酸カリ8%溶液に11番の工程を繰り返す。
13. 12番の工程をもう一度繰り返し、都合3回分の液を作る。
14. 3回作った液を一緒にする。これが、紅染をする紅汁の染料である。
15. 染める布を水に漬けて、かるく絞る。
16. その布を先程作った染料に浸して染め始める。
17. 5分後に薬局で市販しているクエン酸の10%溶液を湯呑み茶碗一杯分作り、染めている布を取り除いてから少量(杯2杯)ずつ入れて布を浸す。
18. 17番の工程を湯呑み茶碗一杯分のクエン酸溶液がなくなるまで繰り返す。(少量ずつ入れるのはムラ染めを防ぐためである。)
19. 潰けっぱなしにしないで、時々動かしながら染めるのがコツ。
20. 赤色の液が黄色に変わってきたら、布を取り出す。
21. 新たにクエン酸10%溶液を布が浸るくらいの量だけ作り、10分間潰けこんで色止めする。
22. 布を取り出して水洗いをし、陰干しする。

紅花酒のつくり方

1. ホワイトリカー(ドライ35) 1.8ℓに紅餅5袋と中ざらめ砂糖500gを広口のビンに入れ密閉して20日間ねかす。
2. 砂糖をとかすため1日1回ビンを振りまぜると良い。
3. 20日間が過ぎたら、広口のビンに木綿で漉しながら、花びらを取り除く。
4. 冷蔵庫に入れて冷やして10日間ねかす。冷やさないとき色がぬける。
5. 10日間ぐらいねかすと飲みごろになるが、そのままか、タンサンで割って飲む。

効 用……血圧・胃腸・婦人病・神経痛等数多くの効用があるとされている。

べに 紅粉(口紅)の精製法



1. 紅餅をきざんで、一晩水に浸す。木綿の袋に入れ、よく揉んで黄汁を洗い捨てる。



2. ザルに移し、^{あくみず}灰水をかけ、紅汁をとりだす。紅汁に梅酢を加え紅を発色させる。



3. ^{あおそでの}青苧布を紅汁に浸し、浸し染めと手絞りを何度も繰り返して紅を布に付着させる。



4. 紅が付着した布（これを「ぞく」という）を水洗いして、これに煮えた灰水をかけ、紅の色素をとり出す。



5. この紅の色素に再び梅酢を加え、絹布を敷いた紅舟に流し込む。



6. これを何回もくりかえし、絹布に沈澱した紅をすくい、瀬戸の容器（紅皿）に集める。

紅花の歴史

古事記にでてくる紅花

「シルク・ロード」という名称は、ドイツの地理学者リヒトホーフェンが名づけたのであるが、紅花はこの道を長年かかって、中央アジアから中国に伝えられたと考えられる。紅花だけでなく、ぶどう・きゅうり・えんどう・ごまなどの食べ物のほか、楽器や舞踊・奇術などもこの道を通って中国に伝えられたという。

紅花は中国へ来たあと、わが国には朝鮮半島を通して伝えられたと思われるが、その時期はいつ頃であろうか。

わが国で最も古い公的な歴史に『古事記』がある。古事記は和銅4年(711)大安麻呂が元明天皇の命を受けてまとめたもので、上・中・下の3巻からなっている。そのうち下巻は仁徳朝から推古朝までのことを書いてあるが、その中に、紅花のことが4回出ている。紅花の記録としてはこれが最も古いもので、そこから紅花伝来の時期を推測することができる。仏教が百済から伝えられたのは、欽明天皇の13年(538)とされているが、紅花もその頃朝鮮から伝えられたと考えてよいのではなかろうか。

貴族を魅了した紅花

紅花は朝鮮から伝えられたといっても、単に種子と栽培法だけが入ってきたのではなく、同時に生花から紅餅をつくり、それから鮮やかな紅を取り、美しい紅染を染めあげる技術をもった人たちもいっしょに渡ってきたことであろう。紅花の伝来は新しい染織文化の輸入だったのである。

紅の美しさは当時の貴族たちを魅了したことであろう。今も残っている正倉院御物の「鳥毛立女屏風」の美人や、奈良薬師寺の「吉祥天像」、同法隆寺の金堂壁画の「菩薩像」など、いずれも口紅や頬紅で化粧している。それらは紅花が上流貴族たちの心をとらえ、その生活をいざどったことの現れである。

紅花の美しさに魅了された貴族たちは、早速、衣服の染織を本務とする役所をつくった。大宝元年(701)に完成した「大宝令」によれば、大蔵省の中に織部司おりべのつかさという役職をおき、その下に染戸うちぞめのつかさを設け、宮内省の内染司うちぞめのつかさという役職の下に染師をおいて、染織の仕事に当らせた。

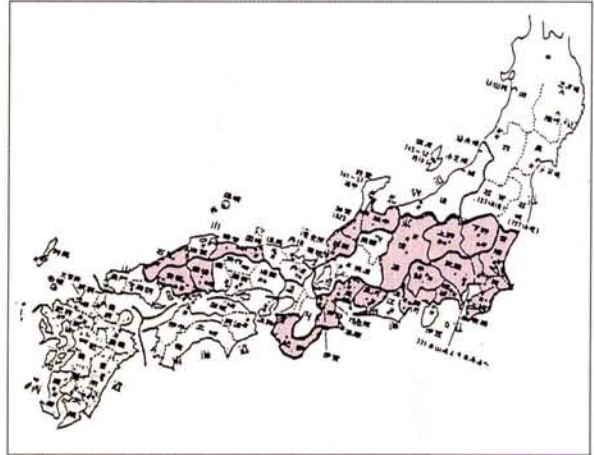
また、平安時代になってから、政治のやり方をまとめた「延喜式」えんぎしき(全50巻)という本がある。これは康保4年(967)にできた養老律令の細かいことを定めたもので、第14巻「縫殿寮」ぬいどのりょうという所に、衣服や紅染についてくわしい記録がある。もっとも、その当時の染色には、紅染のほかに紫染や藍染(紺染)もあったが、紅染が貴ばれていたことは確かである。

紅染はわが国に伝えられると間もなく、国の正式な制度の中で実施されたのである。

納税義務化された紅花

それでは、当時紅花はどの辺で植えられ、役所ではそれをどのようにして入手したのであろうか。行政のきまりをまとめた「延喜式」によると、17才から20才までの男子に対し、一人につき20匁^{もんめ}ずつの紅花を税として納めるよう義務づけた、と記されている。ただし、納税を命じられたのは、全国68ヵ国のうち次の24ヵ国である。

伊賀・伊勢・尾張・三河・駿河・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野・越前・加賀・越中・因幡・伯耆・石見・備後・安芸・紀伊。上の24ヵ国を今の県名にすると順に三重・愛知・静岡・山梨・神奈川・東京・千葉・茨城・長野・群馬・栃木・福井・石川・富山・鳥取・島根・広島・和歌山の各都県となる。その中にはわが山形県（出羽国）は入っていない。「延喜式」では飛騨・陸奥・出羽・壱岐・対馬の各国は遠いので、納税を免除したと書いてある。最初、紅花は九州・四国・奥羽地方以外の、各地で栽培されていたことになる。その頃、紅花はまだそれほど多く必要としなかったので、商品化されておらず、国では納税を義務づけて、必要量を確保しなければならなかったもので、納税義務を免除されている国々では、栽培しなかったものと思われる。



貴族社会の紅花消費量は相当の量に達したと思われるが、一般の庶民にとっては紅花はまだ高嶺の花であった。

信長、紅花を贈る

紅花の美しさは貴族たちをとりこにしたが、生活に余裕のない庶民にとって、紅花はまだ手の届かぬところにあった。わが国の生活文化は室町時代以降（15～16世紀）に向上したといわれているが、紅花の需要もそれに応じて伸びたことであろう。

さて、話を身近な所にもどすと、谷地城主白鳥十郎長久は、全国的情勢をかんがえて、天正5年（1577）に名馬白雲雀を織田信長に贈ったという。当時、馬を贈るということは臣従するという意志表示であり、信長はいたく喜んで、返礼として緞子30局、縮羅30端、虎革3枚、豹革2枚、紅白の狷々皮^{しょうじょうり}とともに、紅50斤を贈った。その手紙は今も榎真司家にたいせつに保存されている。緞子というのはその頃中国から輸入されたしゅすの絹織物で、縮羅というのも高級の織物で、その他虎革や狸々皮も、珍しい品物である。それらの中に紅花が入っているので、当時紅花はいかに貴重な物であったか、はかり知ることができる。

信長から贈られた紅花の単位の「1斤」は160匁で、50斤は8貫目となる。これは干紅花であったと思われる。干し花8貫目といえば当時の生産量からして、5・6反歩からの生産量に当り、相当の量である。ところで、紅花研究家の説によると、この付近ではその頃から紅花が作り始められたということである。信長は遠く離れている出羽の国で紅花を栽培しているということは知る由もなく、十郎長久から名馬を贈られて、喜びの余りその返礼として、貴重品の紅花を多量に贈ってよこしたのであろうか。

最上義光の祈願文

織田信長が白鳥十郎に、名馬を贈った頃、山形城主最上義光が病気にかかり、なおったならば紅花を奉納するとして、湯殿山に病気の平癒を祈願した文書が残っている。

それは天正7年(1579)8月28日付の「敬白湯殿山権現へ立願之事」という標題の文書で、この年、義光は重い病いにかかり、山形の副泉坊という者を遣わし、平癒したならば来年4月8日に、斗帳・神馬・上紅花壹貫200匁を献上することを誓っているのである。この紅花は当然干花であったと思われる。

奉納の期日を来年4月8日としたのは、湯殿山の山開きと関係があったのであろう。当時湯殿山では4月8日に山開きをおこない、8月8日に閉山した。祈願日が閉山後であったので、奉納日を翌年の山開きの日としたものと思われる。その他の記録によれば、祈願のおかげで義光の病は平癒したという。その頃この地方では紅花が作られていたと思われるが、まだ紅染の技術は知らなかったようで、干花を献上された湯殿山では、それをどう処理したのであろうか。ともあれ、この文書は紅花に関する貴重な文書であり、当時紅花は貴重品であったことを示す史料である。

紅花志納の安楽寺文書

織田信長や白鳥十郎と同じ頃、河北町から真宗の本山に紅花を志納したことを示す貴重な文書が、安楽寺に保存されている。その文書は同寺の門徒から本山に志納(阿弥陀の救済に対する感謝の心を金品の奉納によって表現)した「志納金品受取書」で、昭和53年同寺の古い資料を整理中に、住職の名和師と鈴木勲氏が発見し、両氏によって解説をされたもので、5点のうち1点には次のように書いてある。

(前略)

花一きん	彦衛門
花一きん	新介
同一きん	藤衛門ない(家内)
わた十八文め	藤衛門
同卅二文め	甚ない
十九文め	九郎と
わた	
十九文め	同ない
代卅二文	彦衛門ない
同五拾文	せうけん(将藍)
花一きん	さいもん五郎(左衛門)
代五拾文	彦衛門



志納品は代銭3件、綿4件と花4件ずつである。花というのはいうまでもなく「紅花」のことである。

志納者は安楽寺を開いた浄心(俗名名和宗介)のほか岩木村の信者達で、名和宗介というのは有名な名和長年の子孫の一人で、縁あって岩木村に来て隠れ住み、安楽寺を開いた人である。

宛名は「新門様」となっている。新門様というのは、真宗本願時の教如上人のことで、永禄9年(1566)9才の時から、文禄元年(1592)に門跡をつぐまで、27年間「新門」と称していた。新門様宛の志納品の中に、「紅花」があるということは、その頃すでにこの地方で紅花が栽培されていたこ

とを示すものである。

この5点の安楽寺文書は、町内にある紅花関係文書では最も古いもので、町の文化財に指定されている。

最上紅花の評価

白鳥十郎の頃から植えはじめられた紅花は、江戸時代にはいと急速に量産され、「最上紅花」は質量共に高く評価されるようになった。当時今の村山地方を「もがみ」といい、新庄周辺を「村山」といったもので、内陸地方産の紅花を「最上紅花」と総称した。

当時の最上紅花の評価を史料によって調べてみよう。正徳2年(1712)に刊行された「和漢三才図絵」では全国から産出する紅花について、「羽州最上及び山形之産を良と為し、伊勢・筑後之に次ぎ、予州今治・摂州二州産又之に次ぐ」として、最上紅花を最上位においている。それより少し前の元禄4年(1691)に出た「日本鹿子」では、有力産地として相模(神奈川)伊賀(三重)上総(長南一千葉)出羽・筑後(福岡)薩摩(鹿児島)をあげ、元禄10年(1697)版の「日本国花万葉記」でも同じように6つの国をあげている。

時代は少しくだるが、天明4年(1784)に京都の呉服飾山田屋・越後屋の紅染下職であった大森屋権兵衛から御役所へ出した「口上書覚」には、次のように書いてある。

「東国紅花奥州仙台・羽州山形其の外近江近国

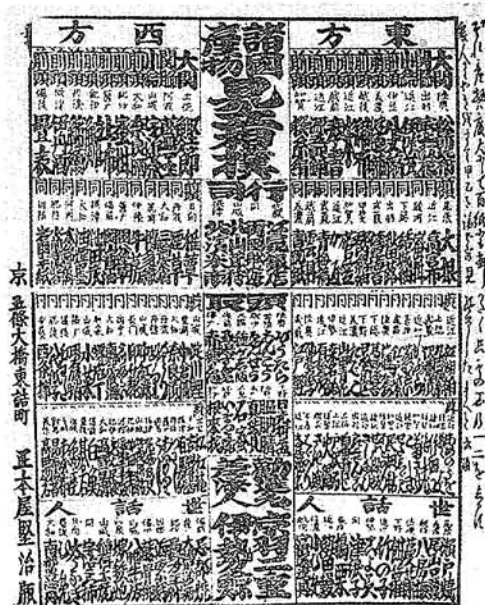
より造出候を、先ず東国紅花と唱え申候。

(中略) 東国紅花凡そ千式参百駄、西国紅花凡五六百駄(後略)」

全国の紅花を大きく東国花・西国花に区分し、その主な生産地をあげ、最後に東国・西国産の総生産額をあげている。

また、文政10年(1827)に秋田出身の学者佐藤信淵はその著「経済要録」に、「紅花を作ることは、羽州村山・最上の二郡頗る其法を得て、極上品を出す。其他諸州に此れを作る者多しと雖も、上品あること鮮し。凡そ紅花を作らんと欲せば、宜く右二州の種子を得て蒔くべし」と書いている。村山・最上を紅花を極上品と評価し、その種子をまくことをすすめているのである。

江戸の後期には最上紅花は奥州産に劣るようになるが、初期には全国最高の品質を保っていたのである。



花市の賑わい

江戸時代初期の最上紅花は質量ともに全国一を誇ったが、その集散の中心地は山形であった。紅花生産がはじまった極く初期には、生花生産農家が干花加工まで自分でおこなったであろうが、やがて生産が高まると「仕入宿」が生花を買い集めてそれを干花に加工するようになった。生花から干花をつくるには干場や収納庫の設備が必要で、資力のない農民や小商人が大量の干花を製造するこ

とは不可能であり、投資力のある山形の大商人が生花を仕入れて干花を作るようになったのである。生産者から買い集めた生花を仕入宿が買い取る場が「花市」で、山形の花市は寛永期（1624～46）に整ったと思われる。「名物紅之袖」（山形市地福寺蔵）という本には、享保頃（1716～35）のようすを次のように書いている。

「遠国とはいいながら、買人売人の有様丸はだか、肌着ばかり、或は笠みのを着し物々しき出でたち、ただ狂人のごとく、余国より来り見物せしは、うたてき事なり」

生花を買うために京都の紅問屋からもわざわざ出向いて来たらしく、明和頃（1764～71）にできた山形の案内記「風流松の木枕」には次のように書いてある。

「紅花時分の最中は市場を立て、京都より紅華中買いの旅人下りて売買仕る。他国の衆はしらぬ。其時分は男も女も狂人のごとく姿を崩し、いつ櫛の齒入りたるままやら、赤裸になり、何か一ヶ月の儲けが一年中の暮らしとなりぬこと故、前後を争ひ親兄弟の見境いもあらばこそ、我劣らじと買ふことなり」

山形の花市場の賑わいはすさまじいものであった。

めばや 仲介業の目早とサンベ

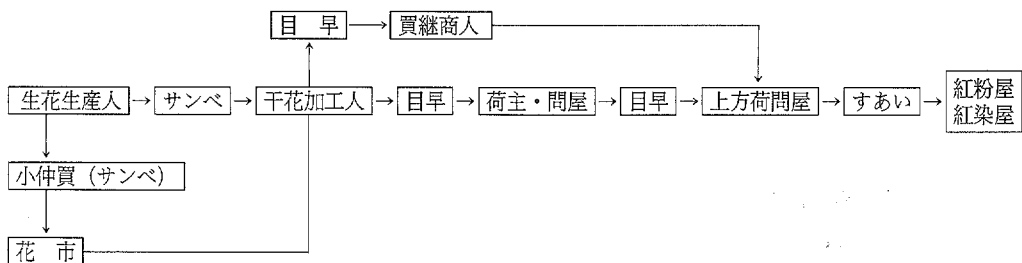
山形の花市は活況を呈したが、生産者から生花を買い集めて市場に持っていき、花宿と取引をしたのが目早とサンベである。両方ともこの地方独特の名称で、目早というのは生花の状況をみて相場を見定め、問屋や買次商人にあっせんする仲介業者で、サンベというのは商人から依頼されて生花の集荷に当たる仲買人のことである。江戸時代の初期には、目早とサンベの区別がなかったと思われるが、紅花の生産量がふえ取引が盛んになると、どうしても生産者と仕入宿との間に立って仲介する業者が必要になってくる。こうして生れたのが目早である。

目早の性格が確立してくると、流通の円滑をはかるため、山形藩では享保16年（1731）にこれを公認することになり、目早たちは仲間を結成し公認の代償として一定額の税金を納めるとともに、売買の口銭など必要事項の協定をおこなった。天明の頃（1781～88）には山形領内に目早が50人、サンベが100人位、谷地付近には両方で25人位おったという。

目早仲間を公認するというはその特権を認めることであり、やがて流通機構が変わるほか、いろいろの問題が生じてきた。流通面では、目早と特定の仕入宿との結びつきが強くなり、花市が次第に衰え、上方から生花を買い求めにくる商人は入手できなくなった。また、目早たちは利潤目あてに、現物を入手する以前に取引を約束し、いろいろの問題が起こるようになった。

それにしても、目早とサンベは紅花流通機構の中で重要な役割を果して、明治初期まで続いてきた。

紅花交易のしくみ



（今田信一著『最上紅花史の研究』より）

まんち 満地朱をそそぐ

天明8年(1788)幕府の巡見使に随行してきた地理学者の古川^{こしやうけん}古松軒は、6月16日(太陽暦7月19日)上山から長谷堂村に出る途中、赤羽毛峠から村山盆地を見おろした時の印象を、著書「東遊雑記」に次のように書いている。

この頂きより山形の郷中眼下に見ゆ。原野大いに開けおよそ十万石もあらんと覚しき所、畳を敷きたる如き^{たごころ}田所なり。この節紅花盛りにて、満地朱をそそぎたる如く、うつくしきこと何にたとえん^{かた}方なし。かようの土地は^{かみがた}上方・中国・西国に^{すく}いまだ見当らず。誠に勝れたる^{ふうど}風土なり。

巡見使というのは、幕府が必要に応じて諸国の実情を把握するため、全国を8地区に分け3人1組にして派遣したもので、そのほかに多くの随行者があった。この巡見使一行が山形に来た時は紅花の最盛期で、満面と咲きほこった紅花を見て、古松軒は「他国に^{すく}いまだ見当らず」と書き記したのである。紅花は決して「朱」ではないが、一面に咲き揃った紅花は、古松軒に強い印象を与えたのであろう。

最上紅花の主産地は最上川沿いの肥沃な平地で、南は上山を限界とし、その北は山形一天童一谷地と続き、西は寒河江、北は東根附近が限界であった。紅花には鋭いトゲがあり、花をつむには朝霧があるうちでないといけないので、朝霧の立ちやすい最上川沿岸が、紅花の生産に適していたのであろうか。

この巡見使一行は山形・天童を通り、6月19日には谷地に来て、大町の田宮五郎右衛門・柴田弥右衛門、工藤小路の和田大兵衛の三軒に分宿している。

紅花二句

眉掃^{おもかげ}を^{べに}俤にして紅粉の花
行末は誰が肌ふれむ紅の花

この2句は今から300年前の元禄2年(1689)、松尾芭蕉が奥の細道^{おくのほそみち}を行脚した時に作った句であるとされている。芭蕉が尾花沢に着いたのは5月17日で、6月朔日に大石田をたっている。その間すすめられて山寺を訪れたのは5月27日と翌28日で、新暦になおすと7月の13・14日で、紅花が咲きほこっている時期であった。沿道に咲き乱れた紅花は、芭蕉の興感をさそったことであろう。

紅花の研究家今田信一先生は「二つの句を味わってみると、『眉掃』の句は咲き始めの可憐な一輪咲きを見つけて心をひかれた時の句であり、『行末』の句は畑一面に咲き誇った紅花のあでやかさに打たれた時の句であろう」といっている。

紅花栽培の北限は東根北部であるが、この附近では4月上旬に種をまいて「土用一つ咲き」といって、7月中旬に咲き始めるのが普通であった。これに対し、山形附近では4月4・5日頃に種をまいて、「半夏一つ咲き」といって、7月2・3日頃から咲き出すのが通例であった。

この紅花の開花期と二つの句の味わいを重ねてみると、『眉掃』の句は東根附近で咲き始めの紅花畑を眺めた時の句であり、『行末』の句は山寺街道沿いの、満面と咲きほこった紅花畑を眺めた時の句であろう、ということになる。

芭蕉は尾花沢から南下して山寺立石寺に詣でては有名な「蟬」の句を、その途中でこの「紅花二句」を残したことになる。

紅花の収量

江戸時代にはいと紅花の需要は急速に高まり、生産は全国的にのびたが、中でも当地方の生産品は「最上紅花」と呼ばれ、質・量ともに全国一を誇っていた。それでは、この付近では1反歩(10アール)から、どれ位の紅花が取れたのであろうか。

7月上旬から咲き始めた紅花をサンベや目早が農家から買い集め、仕入宿の出荷業者はそれから紅餅をつくって京都へ発送した。大蔵村(山辺町)の稲村家はこの地方きっての豪商で、山麓の高楯村の稲村喜七に生花の集荷や紅餅加工の一切をまかせていた。寛政12年(1800)喜七が稲村家へ報告した書類によると、取扱った生花の合計が約1,374貫目で、価格にすると約174両で、それからできた紅餅は約4駄(128貫目)であった。それに要した労力は延男60人、女40人ほどで、紅餅の乾燥と荷造りのために15日間に使った筵は延2000枚以上で、自分の家はもちろん、隣近所の庭先や小屋も全部借用した。

この場合、生花から紅餅生産の歩どまりは9分3厘で、生花の価格は1両につき約7貫900匁であった。

紅花の生産高はその年の天候に大きく左右されるが、一般的に1反歩当りの生花の生産高は30~40貫目で、紅餅にするとその歩どまりはよい場合は1割で、悪い場合は7分位であった。生花の生産30貫目で歩どまりを7分とすると、1反歩からの紅餅の生産は2貫100匁となり、生産40貫目で歩どまり1割とすると4貫目となる。平均して1反歩からの紅餅の生産は、3貫目位というのが普通であったようである。

最上紅花の栽培面積

それでは当時紅花の栽培面積はどれ位であったろうか。

江戸時代にはいと紅花の需要は急に高まり、それに応じて栽培面積が伸びたことは確かであるが、土地の条件があるし、飯米と年貢米を確保しなければならないし、そのうえ紅花栽培には花摘み、花寝せなどに多くの労力を必要とするので、栽培面積にはおのずから限度があった。

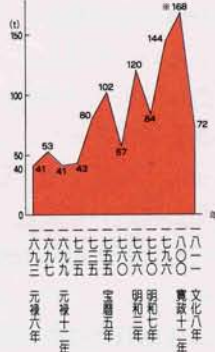
残っている記録をみると、元禄5年(1692)仁田村(寒河江市)の「書上帳」では本畑(もとからの畑地)16町8反7畝2歩のうち、約4町歩程に「例年紅花作り申し候」と書いてあり、新畑(新しくきり開いた畑)35町7反9畝6歩のうち、11町6反歩程が紅花畑であった。とすると、紅花畑の割合は本畑で24%、新畑では32%、本新畑を併せると30%位であった。

また、寛政年間(1789~1800)に山口村(天童市)で宮崎代官所に出した報告の下書は、総畑面積96町9反8歩のうち、「3分5厘程麦作、2分通程紅花作、2分通程たばこ作、2分通程雑穀作、5厘程度屋敷地」となっている。この場合は1分は10%だから、紅花栽培面積は約20%となる。

また、文化5年(1808)東根の関山

江戸時代・村山地方の紅花生産高の変化

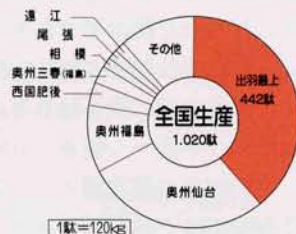
(「最上紅花史の研究」よりグラフ化)



※1681...時価17億1千万(ぐらい)
昭和50年 1両 = 2768千円とする

全国の紅花生産(享保16年(1731年))

(阿部孝吉家の資料による)



1駄=120kg

村附近の村々では「たばこ6分通、紅花1分通」と報告している。

これらを総合してみると、畑の作物品目は適地適作の原則にたち、紅花栽培はその村の事情により10%位から、最高30%位であったようである。

最上紅花の値段

最上紅花は有力な換金作物であり、その売上代金は生産者の家計をうるおし、その荷役銭（出荷税）は幕府や藩の有力な財源となった。それでは、その値段はどれ位であったろうか。

京都の紅問屋との取引は「駄」単位でなされた。干花は重さ20匁の特製の紙袋に入れられ、皆掛け500匁のもの16袋（8貫目）包を1梱といい、4梱32貫目を1駄といった。1駄とは馬1頭で運ぶ重さのことで、1駄の重さは品目によって多少違っていた。

いうまでもなく、物の値段は需要と供給の関係で決まり、それに品質がからんでくる。江戸時代260年間には時代の変遷もあった。特に紅花は天候に左右されやすい植物で、年による豊凶・品質の格差が大きく、同じ年でも質の上・中・下で値段が違った。

幸い、大町念仏講帳には毎年紅花その他穀物類の相場がくわしく書いてある。そのほか京都府立総合資料館には、文化8年（1811）から30年間にわたる資料が残っており、紅花の値段をほぼ正確に知ることができる。

地元谷地での最高は1駄につき安永6年（1777）の97両～105両で、最低は享和2年（1802）の24両～28両であった。最高と最低では約4倍のひらきがあるが、大半の年は30両から70両位の間を上下していた。それでも動きが大きいのが、大まかにいって1駄45両位であったとみることができる。

それにしても気がかりなことは、最上紅花は武蔵・下総・常陸・仙台産のそれに比べ、10両位安かったことである。はじめは品質最高といわれていたが、生産者の不心得により品質が次第に低下していったためである。

最上紅花の輸送経路

山形や谷地で集荷された紅花は京都へ送られた。それでは、その輸送経路はどうであったろうか。

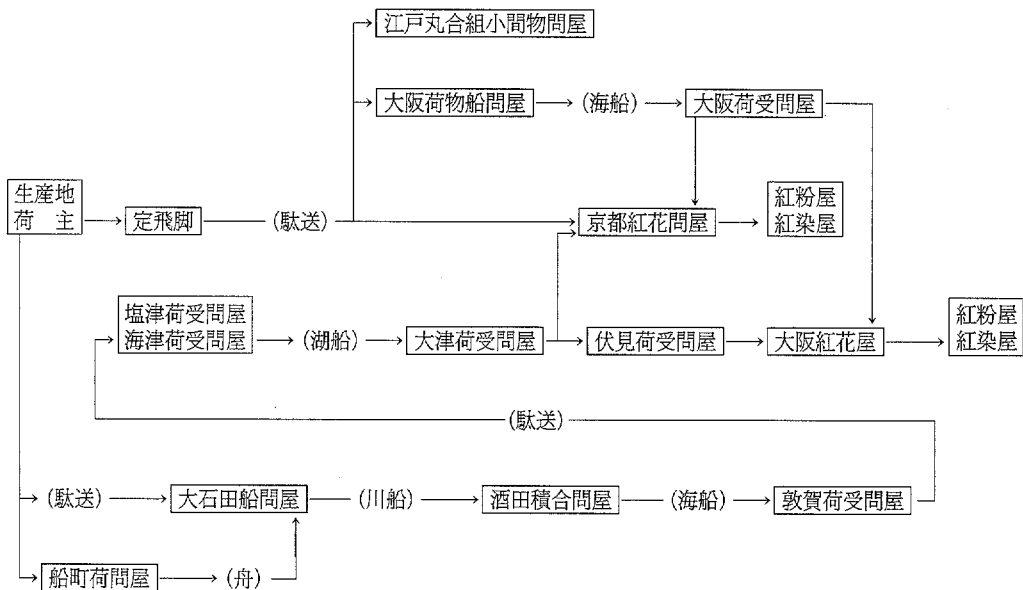
荷主のもとで1梱4貫目に梱包された干花は、大石田まで駄送され、大石田から舟に積んで最上川をくだし、いったん酒田で陸揚げした。酒田から大きな海船に積みかえて敦賀に陸揚げし、敦賀からは駄送して琵琶湖北岸の塩津か海津に運び、そこから船に積んで琵琶湖を渡して大津に送り、大津から淀川をくだして京都に送るとというのが、お決まりの最上紅花の輸送経路であった。

幕府領や各藩の年貢米は江戸か大阪へ送ったが、その場合は酒田を出た海船は日本海を南下し、遠く下関を廻って瀬戸内海にはいり、そこから太平洋に出て江戸へ行くという、いわゆる「西廻り航路」をとった。陸上を輸送するよりは、海上を輸送する方が遥かに効率的であるが、紅花は貴重品なので一部駄送しても採算がとれたのである。

輸送途中の大石田・酒田・敦賀・塩津（海津）・大津にはそれぞれ荷主となじみの問屋があり、荷主は紅花の銘柄・数量とともに、手板に各地の問屋名を書き、それに全行程の概算運賃を添えて発送した。各問屋では所定の運賃を差引いて次の問屋に送り、過不足は最後に京都の紅問屋で紅花代金とともに精算した。

この地方の紅花は大石田まで駄送して、大石田から舟に積むのが慣習で、この点が最寄りの舟付場から川舟に積込む米の輸送と違っていた。それは紅花の駄送によって、天童・楯岡・尾花沢などの宿駅を保護する、というねらいがあったためである。

最上千駄の輸送経路



(今田信一著『最上紅花史の研究』より)

最上紅花の品質低下

最上紅花の品質は、最初のうちは全国最高であると各方面の評価が高かったが、需要の拡大にともない生産が増加するようになり、享保頃（1716～）からその品質は次第に低下するようになった。そして元文3年（1738）には京都の紅問屋仲間から、「品質粗悪で歎かわしい次第である」という書状が、山形・谷地の荷主のもとに到着した。当地の関係者は書状の内容と問題点を検討し、改善策として次のような対策を立てた。

その第1は花摘みを適期に行い、しかも10時頃迄には摘み終るように、ということである。これ迄は値段がよい時はむりに早摘みし、しかも昼過ぎ迄も摘むことがあった。そうした利益目あての摘み方が品質低下をもたらしたので、それを改めるということである。

その第2は「着せ花」をしないことである。着せ花というのは、質の悪い花を良くみせるため、その上に上質の花をかぶせてごまかすことである。

第3は「置き花」をしないことである。置き花というのは、雨降りの日に摘んだ濡れた生花を1晩晒しておいて、次の日売りに出すことである。そうすると花は腐ったようになって、品質が低下するのである。

そのほか、花に雑物を混ぜないこと、花市場の取引きを早くきりあげること、ということも打出した。

荷主たちはこのような改善策をよく守るように、山形藩庁から各村々へ示達してくれるように藩へお願いした。紅花生産は藩にとっても重要なことであり、藩では早速その通りにお触れを出したが、もともと品質低下の原因は、生産者と集荷業者たちの営利本位の行為であったわけで、お触れの効果を早急に期待することはできなかった。

国産紅花の衰退

紅花は有力な換金作物であり、江戸末期までその生産量を維持してきたのであるが、いよいよ幕末になると養蚕や茶の栽培が普及してきて、紅花はやがてそれらの生産に押されるようになった。こうした傾向は、その当時全国的なものであった。

その頃、国全体としては紅花の需要がへったわけではないので、国産紅花の不足分は中国や印度産紅花の輸入によって補った。そのため、外国産紅花の輸入は明治になると急にふえ、輸入額の最高は明治8年で、およそ40万斤（2万4000kg）に及んだ。

国産紅花生産に最終的にとどめをさしたのは、ヨーロッパからの化学染料の輸入である。サボテンの寄生虫コチニールを原料として作ったカルミン・コチニールは鮮かな紅色の染料で、わが国には寛政2年（1790）頃から長崎の出島にもたらされていたが、明治10年頃から輸入額がふえ、食用としても使用されるようになった。その後、明治16年からアニリン染料の輸入が急にふえ、従来紅花からとっていた古来の紅は、完全に駆逐されることになった。

あの美しい古来の紅花の色あいは、外国製の化学染料のそれよりは遥かにまざっているのであるが、人手をかけて生産する古来の紅花は、価格の面で大量生産の化学染料には、とてもたちうちできなかつたのである。

こうして国産紅花とともに最上紅花の生産は明治になると急に衰え、其の生産額は明治17年には僅かに3駄となり、やがて完全に姿を消すことになった。

最上紅花の命脈

紅花は明治になって商品価値を完全に失ったが、何とかして最上紅花を再興したいと考えた山形県の勸業担当者は、明治10年上野公園で開かれた「第1回国内勸業博覧会」に紅花を出品したり、その後、紅花の特産化をねらってその対策をたてたりしたが、時代の趨勢はどうすることもできなかった。

その間、最上紅花を何とかして保存したいとして、収益を度外視してその栽培を続けてきたのが出羽村（現山形市）の人たちである。それに天皇の御即位式や、伊勢皇太神宮遷宮式用の調度品の染色には、必ず古来の紅花を用いており、出羽村の関係者はそのつど依頼を受けて用立ててきた。

先ず、明治41年は皇太神宮の遷宮年に当っており、その前、38年に県農商課を通して紅花買いあげの通知があった。県では出羽村の関係者に依頼して、何とか必要量を確保し、その責任を果たすことができた。これを契機にして、もと紅屋をしていた山形市の岩瀨店が高擡村（現天童市）の農家に依頼して、伝統のある最上紅花の保存に努力してきた。

ついで大正8年の明治神宮の造営、昭和3年の天皇御即位式、翌4年皇太神宮の遷宮式の時も、出羽村の人たちは紅花の御用命をうけその大役を果たしてきた。

明治維新の時、新政府は「富国強兵」を新しい国づくりの方針とした。それから120年、その間の歴史をふり返ってみるに、「富国強兵」のうち「強兵」は太平洋戦争で見事に失敗したが、その後の経済成長で「富国」のねらいは、ほぼ達成することができた。その間に失なわれた物を探し求めてみたら、その中のひとつに紅花があった。こうして、経済大国の豊かな社会の中で、紅花のもつ底知れぬあの美しさが、再び人々の心をとらえることになったのである。

紅花生産と文化交流

紅花のまち河北町

町が、紅花を町の花と定め「べに花の里・かほく」を標榜している理由は、江戸中期以降にみられる最上紅花の集散がこの町でおこなわれたことによります。

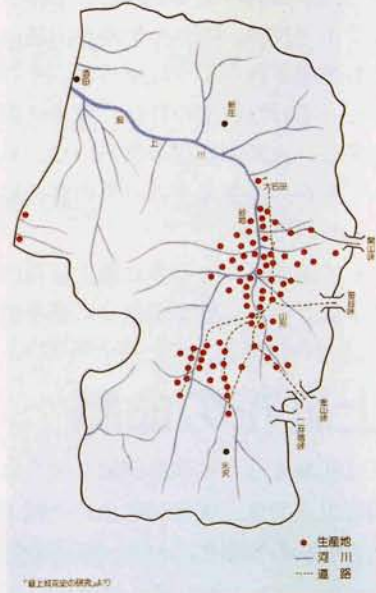
町には、天正年間(1573~92)の紅の生産を物語る資料が残っており、江戸時代も寛政年間(1789~1801)ごろから安政年間(1854~60)あたりまでは、いわゆる最上千駄の時代で、全国生産の50%をこの村山地方で生産していました。

紅花は中国から渡来し、次第に雪深い東北地方等でも栽培されるようになりました。このように、紅花は岩手県以南の日本全国で栽培されたこととなりますが、特にこの村山盆地周辺が全国生産の半数を占めるようになったのは、土地が紅花栽培に適しており、換金作物として重宝されたためといわれています。

この町に最盛期には20軒に及ぶ紅花荷主問屋があり、更に仲買人の花買仲間の目早やサンベと呼ばれる人達が25人から30人を数え、山形市につぐ紅花の一大集散地でありました。

紅花の生産〈江戸時代〉

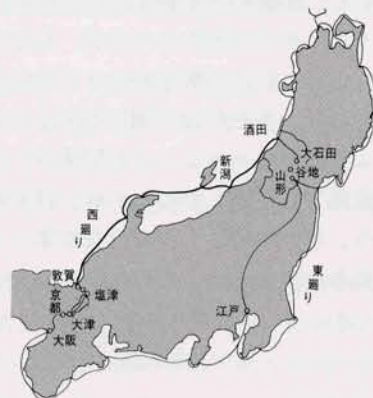
畑の面積……約1,200ha
生産高……約120,000kg



紅花交易

このようにして生産された紅花は、京都や大阪へ移出されました。寛文年間(1661~73)幕府の命を受けた河村瑞賢の差配などもあって、江戸・大阪への物資の輸送が最上川を利用した酒田出しになると、産物の流れがおのずと関西方面に移り、京都・大阪には近江商人や伊勢商人が定住し、最上の商人たちも最上店や谷地店と呼ばれるいわば出張店を持つようになりました。当地方の物産である米・紅花・大豆・青芋・漆・まわた・油などを移出した、その返り荷として、関西方面から呉服地・繰り綿・瀬戸物・塩・砂糖・小間物等が運び込まれました。

特に調度品・絵画・書籍・京人形などの美術工芸品が数多く移入され、現在貴重な文化財として町内に数多く保存されています。



紅花を見守る紅花地蔵

ここは蔵王連峰をのぞむ上山城下。二日町というところに、高さ50センチほどの小さな地蔵様がありました。紅花の季節になるときまって近郷近在から大勢の参詣人がやってきて、お札をいただいでいきます。紅花畑にこのお札を立てておくと、茎が折れる病気から紅花を守ってくれるというのです。人々はこの地蔵様を紅花地蔵とよんで大切に祀り、紅花のすこやかな成育を祈り、あわせて五穀の豊饒を願ったのでした。

(殖産銀行発行「紅花」より引用)



冠位十二階制の色彩

冠位十二階の制度は、推古天皇11年（603）12月に聖徳太子が創案したものといわれます。

この制度は、色の異なる冠を用い、朝廷における席次を定める制度です。その順次を十二階にわけ、名称は、大小の徳・仁・礼・信・義・智でこれにそれぞれ紫・青・赤・黄・白・黒に染めた冠をあてています。

(ものと人間の文化史、「色」より)

紅花大尽と文化の道

紅花大尽といわれた尾花沢の豪商鈴木八右衛門には、次のようなエピソードがあります。

江戸時代の元禄頃のこと、最上の豪商が紅花の荷を江戸に送り出しました。ところが、江戸の商人たちの不買同盟にあい、荷は宙に浮いてしまいました。そのとき彼は、それではと品川の浜でその荷を焼いてしまったのです。（実は紅殻を塗りこんだ古綿荷か鮑屑のようなものだったのです。）それが知れわたるとたちまち紅花の値はハネあがり、それをまって本物の紅花を売って大金を手に入れた彼は、かの吉原の大門を閉めきって豪遊したのです。噂は江戸の巷に流れ、さすがの江戸っ子も紅花商人のきつぷのよさに舌を巻き、吉原では「最上衆なら粗末にならぬ、敷いて寝るよな札くれる」などと唄われたともいいます。

紅花商人に対する金融・商社的な役割を果たして産をなした尾花沢の豪商鈴木八右衛門を人よんで紅花大尽といいます。もちろん、この話は伝説です。最上紅花は主として京・大阪に積み出されていたもので、江戸にはそれだけ大量のものが送られてはいなかったとするのが通説です。けれど、紅花商いによる最上商人の繁盛ぶりはよく伝えられています。

江戸で名をあげた鈴木八右衛門は、清風と号して俳諧に親しんだ人でもあり、俳聖芭蕉とも交流がありました。芭蕉は奥の細道の途中、尾花沢の清風のもとに十日間も滞在し、句会を開いたり、山寺に遊んだりしています。今、尾花沢市の芭蕉・清風歴史記念館には当時の資料が保存されていますが、多くの紅花商人が同じように上方文化や江戸文化をふるさとに持ちこみました。紅花流通の道は、いわば《文化の道》でもあったのです。

(殖産銀行発行「紅花」より引用)

紅のことわざ

◆紅は園生そのうに植えても隠れなし

(大成する人物は子どもの時から常人と違って優れた素質が認められるの意)

◆柳は緑 花は紅

(天地自然のあるがままで、人工の加わらぬさま)

◆万緑ばんりよく叢中そうちゆう 紅一点

(多くの男性の中にただ一人女性がまじっているたとえ)

◆葉九層倍 花八層倍

(売値が原価にくらべて非常に高いこと)

◆尼御前の紅

(不似合いなことのたとえ)

◆あかがり足もみうらに紅絹裏

(紅絹裏をちらつかせて歩く女性の素足にあかぎれが切れていること 不似合いで艶消しな取り合わせをいう)

◆江戸の紅絹裏 難波の紫 都きむくの黄無垢

(それぞれの地では流行おくれの衣服とされたところから、古びて流行おくれのものとのたとえ)

◆江戸紫かのこに京鹿子

(紅染は京都の名産、紫は江戸の銘物である 江戸時代の東西両都の染色の特徴をいうことば)

◆紅は染むるくれないに色を増す

(紅の染色は、最初は色薄く何回も繰りかえし染めて濃くすることから繰りかえし努力することが大切であるということ)

◆女かたんは華丹ようちゆうの窈窕を乱すをにくむ

(華丹はおしろいや紅の意、お化粧も過ぎると逆効果になる)

◆人に千日の好無く 花に百日の紅無し

(人の親しい交際も花の盛りと同様に長続きしないものだ)

◆宝剣は烈士に贈り 紅粉は佳人に贈る

(宝として大切にしている剣は勇士に贈り、紅とおしろいは美人に贈る 物を贈るに当を得ていることのたとえ)

◆紅葉もみじに置けば紅の露

(環境によって外観の変わることのたとえ)

◆木綿布子もみに紅絹の裏

(粗末な木綿の綿入れに豪華な紅染の絹をつけること つり合わないことのたとえ また外見より内実がすぐれていることのたとえ)

- ◆寒中の丑の日に買った紅は葉になる
(寒中に作られた紅は品質がよいうえ口中の荒れを防ぐ 丑の日に買うと小児の疱瘡に薬効があるという)
- ◆売り物に紅をさせ (花を飾れ)
(売る品物は美しく見せよ)
- ◆^{べにおしろい}紅白粉は女のたしなみ
(紅や白粉で化粧することは女として大切な心がけの一つである)
- ◆誰に見しよとて^{べにかお}紅鉄漿つける みんな主への心中立て
(誰に見せるために化粧するものでもありません それは皆すべていとしいあなたへのまごころを示すためなのです)
- ◆昔^{なじ}馴染みと紅花染め (紅花色)
(色がさめてもきが残る 昔馴染れ親しんだ人はいつになっても気になって忘れることができない)
- ◆^{ちしお}千入に染むる紅も ^{くれない}染むるによりて色を増す
(よいものでもさらに心をくばりみがきをかけてすぐれたものにすべきである)
- ◆霜葉は二月の花よりも^{くれない}紅なり
(霜のために変色した紅葉は二月の花よりも赤くて美しい)
- ◆朝紫に^{くれない}夕紅
(朝は紫色に見え夕方は紅色に見える遠い山の美しさをいったことば)
- ◆^{あした こうがん}朝に紅顔ありて 夕べに白骨となる
(人の生死のはかり知れないこと 世の無常なこと)
- ◆^{こうがん}紅顔の美少年
(若々しく生々とした血色の美少年)
- ◆花染めの移ろい易き人心
(草木染めは変色し易いことから、人の心のうつろい変わりやすいこと)
- ◆^{べにあじろ}紅網代
(かごかき棒が紅花の染料を塗ってある網代かご 大奥にいる御年寄が御台所の代参などで寺院などに参拝するときに乗る)
- ◆^{べにちやう}紅茶宇
(ポルトガル人がもたらしたインド産の薄地琥珀織の紅色の絹 袴や袴を作った)
- ◆来迎の柱は金箔 女の湯具は^{ゆぐ}緋縮緬
(何事も道具立てがよくないと立派に見えない)
- ◆緋縮緬 虎の皮より恐ろしい
(緋縮緬は商売女の腰巻に、虎の皮は鬼のふんどしに用いられたところから、商売女は鬼より恐ろしい)

山形地方の京ことば

紅花船の帰り荷として、上方の紅染衣装や雛人形などが、酒田から最上川をさかのぼって、当地方の人々の暮らしを豊かにしました。これらの品々とともに、「京ことば」も移入されました。最上川は交易の道であり、文化の道でもあったのです。

『京ことば辞典』	意 味	『山形県方言辞典』
アッチャコッチャ	あべこべ・さかさま・反対	アッチャコッチャ
アンジュ	尼僧・尼さん	アンジュ・アンジョ
イシナゴ	小石・砂利	イシナゴ・イシナンコ
インキョ	離れ座敷・分家	インキョ・エンキョ
ウルカス	水に浸して水分を吸収させる	ウルカス
オーキニ	たいそう・ありがとう	オーキニ
オシズカニ	別れるときのあいさつ	オスズガニ
オツケ	お汁	オツゲ
オバンデス	晩のあいさつ	オバンニナツタナシ
カッチャイ	裏返し・さかさま	カッチャエ・カッチャ
カタマエサガリ	着物の左右の裾が揃わぬさま	カタマエサガリ・カタメサガリ
カナ	木綿糸	カナ・カンナ
カマス	刻みタバコを入れる袋	カマス
クチベラ	唇	クチベラ・クチビラ
ゴショイモ	じゃがいも	ゴショイモ・ゴシヨイモ
ゴモクタ	ごみ・もくた	ゴンモクタ
コンニャ	今夜	コンニャ
サカイ	理由をあらわす「から」	サゲ・サゲテ・ハケ
シナコイ	柔軟な・しなやかな	シナコイ・スナコイ
シマツ	節約・儉約	シマツ・スマツ
シミル	凍る	シミル・スミル

シャル	～なさる	シャル
センド	先日・以前	センド・センドナ
ゾーヨー	雑多な費用・雑費	ゾーヨ
タズク	つかまる・しがみつく	タズグ・タグヅグ
ツッパリ	心張り棒・つかい棒	ツッパリ・ツッパリポー
ツルツル	うどん・そうめん	ツルツル・ツォロツォロ
テンコモリ	山盛り	テンコモリ
ドーブク	綿入羽織	ドーブク・ドンブク
トノグチ	家の入口	トノグツ
ナガチョロイ	細長い	ナガチョロイ・ナガペロエ
ニギニギ	握飯の幼児語	ニギニギ・ニキニキ
ネツカラ	全然・一向に・もともと	ネツカラ
ノー	終助詞「ね」	ノー
ハヤス	野菜などを細かく刻む	ハヤス
ヒボ	紐	ヒボ・シボ
ヒマダレ	ひまつぶし	ヒマダレ・シマダレ・ヒマダオレ
ヘゲル	はがれる・はがれ落ちる	ヘゲル・ヘガレル
ベチャコイ	平たい・平べったい	ペッタラコイ
ボウ	追う・追いかける	ボウ
ホーケル	惚ける・もうろくする	ホーケル・ホロケル
ホコエル	草などが成長する	ホゲル・ホキル・ホギル
ホダレ	つらら	ボーダラ・ボンダラ・ボンガラ
ホンニ	本当に	ホンニ・ホニ
ボンノクソ	盆の窪	ボンノクド・ボンヌグド
マクレル	倒れる・転げ落ちる	マクレル

参考文献 井之口有一・堀井令以知 『京ことば辞典』 東京堂出版 平4
山形県方言研究会 『山形県方言辞典』 昭45

紅花関係年表

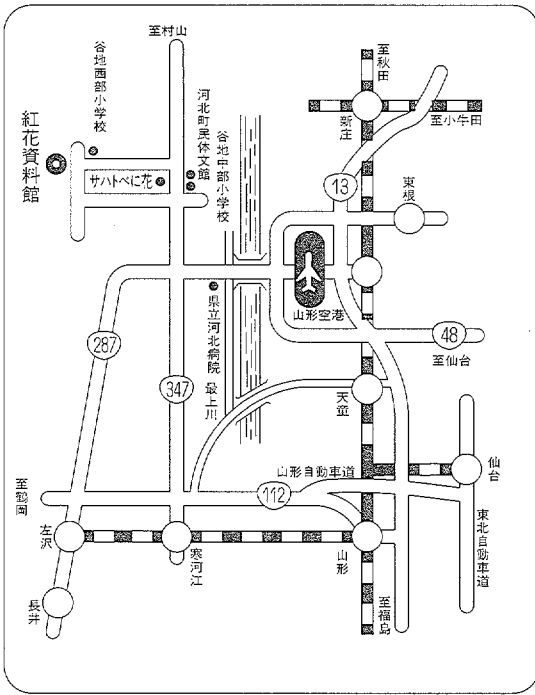
紀元	西暦	できごと
延長5	927	『延喜式』に紅花上納の記事あるも出羽国では貢納の義務なし
天正頃	1573～	河北地方に紅花栽培拡大される(安楽寺文書)
5	1577	織田信長、名馬献上の返礼として谷地城主白鳥十郎に紅50斤を贈った
寛文12	1672	西廻り航路で羽州御城米船が酒田を出港
延宝8	1680	紅花の帰り船佐渡沖で難破、慈眼寺本尊行方不明となる(慈眼寺文書)
天和2	1682	京都の紅花問屋「稻荷講」を組織する。
3	1683	友禅染の小袖京都で流行、女性の衣服制限令出される
元禄2	1689	芭蕉「奥の細道」行脚
12	1699	紅花記事、この年より記入される(大町念仏講帳)
16	1703	大石田河岸が栄え、舟数264になる 友禅染流行
正徳元	1711	紅染下地、この頃より土産につかわれる
享保元	1716	雨不足、紅花高値 北口市公認なる 享保の改革はじまる
4	1719	大雨、大洪水、破船つづく 紅花駄不足故に高値となる 80両
7	1722	紅花京商い高値、商人利益多し 儉約令出る
10	1725	5月大洪水、紅花駄数不足400駄ぐらい
14	1729	大日照り、紅花不足、農民商人迷惑する
15	1730	『名物紅の袖』記される
18	1733	湯殿山丑年参り賑わう
20	1735	幕府が紅花問屋(稻荷講)を公認、産地直扱い禁止される
元文3	1738	紅花問屋から荷主あてに品質低下の苦情申し入れ
5	1740	柘屋甚右衛門ら代表6人が、京都所司代に対し稻荷講を訴訟するが、判決くだらず
寛保元	1741	紅粉屋へ現金直売仰付けられる
宝暦2	1752	谷地の久兵衛、儀兵衛ら「紅花売買場所」を京都に設立する運動を起こす 紅花上作、谷地郷豊作、京着50両
5	1755	谷地郷より340～350駄ほど生産 大凶作庶民飢えに苦しむ
明和2	1765	京紅花問屋の専売崩れ、最上紅花高値となり百姓喜ぶ この頃『風流松の木枕』記される
3	1766	6月29日、紅花摘み船転覆、11人死亡する
安永元	1772	京紅花問屋、紅花売買の独占権幕府に願ひ出る
天明8	1788	古川古松軒『東遊雑記』を記す
9	1789	家具・紅染衣服・道具の贅沢禁止令出る
享和元	1801	照り勝ちにて紅花不作、上方不景気、商人弱る
2	1802	天候不順、紅花船能登沖にて破船、谷地商人損害甚大となる
文化3	1806	5月大洪水、紅花流され駄数不足する
5	1808	干花下落し、残花多く、最上一統迷惑する

紀元	西暦	できごと
文政 5	1822	後沢の太田幾右衛門に伏見宮より紅餅のご用命あり
7	1824	日照りつづき、紅花2度蒔付け、紅花不景気、庶民難儀する
天保元	1830	洪水にて紅花不作、畑作は虫付く
4	1833	大飢饉諸人飢える 紅花不作 紅花種の他国出荷を禁止する
7	1836	住吉大社に紅花荷主、紅花問屋によって紅花灯籠寄進される
11	1840	越後今町沖にて2船破船、山形商人被害多し
12	1841	天保の改革はじまる
13	1842	最上川航行制限解除、谷地河岸賑わう 荒町村大火 紅商人によって神明宮再建される
嘉永 6	1853	本木林兵衛・播州姫路の商人達、下槇白山神社に石籠を建立する 紅花資料館の武者蔵を建立する
安政元	1854	紅花資料館の座敷蔵の襖絵描かれる
2	1855	8月若狭沖にて紅花船破船、谷地・山形商人被害受ける
3	1856	紅商人によって定林寺に五百羅漢寄進される
6	1859	安政の開国条約結ばれ、外国産紅輸入される
文久 3	1863	紅花旱損により不作 紅花摘日記書きはじめる 紅花資料館の御朱印蔵 建立する
元治元	1864	紅花並作 京都大火につき、花高値となる
慶応 2	1866	谷地大火 大洪水、紅花流される 沢畑刀作り盛んになる
明治 8	1875	大洪水、最上川通り紅花流され百姓弱る 新桑植栽はじまる
10	1877	「第1回国内勸業博覧会」に紅花を県として出品する
14	1881	この年より紅花相場の記録なし
22	1899	皇太神宮遷宮式に先代岩淵栄治が紅餅を納入する
41	1908	皇太神宮遷宮式に高島屋を経て岩淵店にご用命があり紅餅を納入する
大正 5	1916	新紅花摘み唄流行する
9	1920	明治神宮遷宮式に岩淵店が紅餅を納入する
昭和 3	1928	天皇御即位式に高田装束店を経て出羽村農会が紅餅を納入する
4	1929	皇太神宮遷宮式に高田装束店が紅餅を納入する
28	1943	皇太神宮遷宮式にご料の足しに（紅花を）納入する
40	1965	山形県紅花生産組合連合会が設立される
55	1980	『べに花の里・かほく』を標榜する
59	1984	紅花資料館開館する
61	1986	紅の館完成する

参考文献

「河北町の歴史 上」「河北町の歴史 年表」(町誌編纂委員会) / 「最上紅花史の研究」「べにばな閑話」(今田信一著) / 「紅花幻想」「紅と藍」(真壁仁著) / 「紅花」(殖産銀行) / 「ものと人間の文化史 色」(前田雨城著) / 「最上紅花のおもかげ」(楨清哉著) / 「羽陽文化18号」 / 「山形の紅花」(黒木衛著)

案内図



お問い合わせ

☎999-35

山形県西村山郡河北町谷地戊1143

河北町紅花資料館 ☎(0237) 73-3500

河北町商工観光課 ☎(0237) 73-2111

河北町観光協会 ☎(0237) 72-3787

※無料駐車場あります。

発行日 平成6年12月21日

編集 河北町紅花資料館

発行 河北町教育委員会

印刷 有限会社 昭報社印刷



表紙題字 長登東皐(直矢) 表紙写真 紅染袱紗〈部分〉